

501
262



始



上

50/-262



鍬

の

光

り

堀

内

新

泉

著



大正 10 12 27

内交

序

國力増進の基礎は、自治制度の發達に在り。苟も國家の前途を憂ひ、國民の幸福を期するものは、地方自治制度の研究並に實行に、最も意を殫さざるべからず。今日世界の富國悉く茲に淵源流出せざるはなし。我が國亦この氣運著しく進歩し、官民同心一致協力して、銳意策勵、啓發實行に努めし結果、全國各地到處に模範町村續續として勃興し來るは、豈に慶賀すべきの現象に匪ずや。

この趨勢に乗じて各地の町村は、先進の模範町村に倣ひ、その町村是を確立して結合一致の勢力を作り、各種の産業を起して村民齊しく精勵努力拮据盡瘁懈ること無くんば、多くの歳月を要せずして、我が帝國は崇高壯烈なる實力と威嚴とを有する東洋鎮護の一大強國として、更に其の面目を一新すると共に、その大本領を世界列國に發揮することを得

得べき也。

そもく今日世上に知られたる幾多の模範町村は如何にして起りしか。その何れの町村に於いても必ず先づ一人の熱誠なる精神家ありて、その首唱者として之を鼓吹し、之を實行し、之を感化教導し、貧窮困頓の爲、殆ど人生に失望悲觀せる村民の頭上に一大警鐘を打鳴し、彼等の總てに勇氣の熱血を注ぎ、希望の光を與へ、その身常に之が犠牲となり、或は無智無氣力なるが爲に爲すを知らざる、或は遊惰放縱にして爲すを欲せざる村民を扶掖誘導して團結せしめ、一般に固く勤儉主義を奉じて各種産業の發達に努めしめたる結果ならざるは無し。

余は近年此等模範町村の建設史を繕く毎に、その建設者の計畫、實行、並に其の尊敬すべき人格に就き、常に多大なる興味を以て之を讀めり。その度毎に窃に思へり。未だ廣く世上に知られざる斯くの如き尊敬

すべき人人の實歴を紹介して世に出さば、精神的にも物質的にも世上の人に利益を與ふること決して尠なからざるべしと。その後余は此の目的の幾分を達して、今、本書を世に公する機會を得たり。世人余が文の拙きを咎めず、一に書中主人の尊敬すべき受郷的事業史を熟讀玩味し、今日將に枯渴衰亡せんとする地方幾多の農村の復興に其の心を傾くる人千百人中に一人あらば、著者の光榮將た何物か之に過ぎん。

鍬の光り

目次

九	八	七	六	五	四	三	二	一
難	村	決	中	初	郡	村	黄	春
村	長	心			長	の	金	の
の	に	と	對	の	入	川		
難	成	準		添				
務	れ	備	食	面	書	口	橋	光
.....
二九	二六	二三	一九	一五	一一	七	三	一

三 七	三 六	三 五	三 四	三 三	三 二	三 一	三 〇	二 九	二 八	二 七	二 六	二 五	二 四
哀	伯	慘	發	豺	再	至	兄	父	分	雪	わ	愛	村
	父				度	孝	の	の	家		が	郷	治
	の	又			の	の	暴	遺	の	と	家	の	の
	無				暴	の	言	一	發	歴	の	改	善
戚	心	慘	狂	狠	行	人	狀	言	展	墨	史	心	善
.....
一三七	一三三	一二八	一二四	一一二	一一七	一一三	一〇九	一〇五	一〇二	九八	九四	九〇	八九

二 三	二 二	二 一	二 〇	一 九	一 八	一 七	一 六	一 五	一 四	一 三	一 二	一 一	一 〇
村	歸	農	模	軍	加	村	長	速	青	村	農	注	至
民	農	家	範	隊	藤	民	閑	納	年	治	民	意	誠
の	の	の	的	生	氏	の	な	主	の	の	の	の	の
墮	動	處	農	活	の	主	聲	義	空	情	軍	の	情
落	機	女	民	活	立	業	聲	義	想	況	服	人	情
.....	身
八三	七九	七六	七一	六八	談	六四	五七	五二	四八	四五	四一	三七	三三

五二	初	商	賣	二〇〇
五三	ナニ	糞	ツ	二〇四
五四	舖	の	切	二〇七
五五	汗	の	價	二一一
五六	細	民	の	二二六
五七	人	生	の	二二一
五八	和	尙	の	二二五
五九	道	義	の	二二九
六〇	意	外	の	二三三
六一	靈	場	め	二三六
六二	山	中	の	二四〇
六三	生	の	希	二四四
六四	索	麩	製	二四八
六五	殖	林	と	二五二
			蠶	
			業	
			の	
			研	
			究	

三八	伯	父	の	變	死	一四一	
三九	た	く	み	の	絹	一四五	
四〇	二	人	の	勇	士	一四九	
四一	溫	和	主	義		一五二	
四二	初	夏	の	月		一五六	
四三	盲	ケ	淵			一六二	
四四	長	者	の	相	貌	一六六	
四五	久	留	木	の	伯	母	一七一
四六	怨	み	の	一	念	一七六	
四七	心	學	の	研	究	一八〇	
四八	無	上	の	愉	快	一八四	
四九	貧	家	の	姉	妹	一八八	
五〇	勇	氣	の	光		一九一	
五一	新	計	畫			一九五	

六六	人生の快事	二五六
六七	衰微の兆候	二六〇
六八	歡呼の聲	二六四
六九	墓詣	二九六
七〇	村民墮落の原因	二七四
七一	生臭坊主と博徒の親分	二七八
七二	村民の貧乏人根性	二八二
七三	農民訓	二八六
七四	農馬の使用法	二九二
七五	奉公人の奨勵法	二九六
七六	糞を恃まず鋤を頼め!	三〇〇
七七	夏の朝	三〇五
七八	村民の隠謀	三〇九
七九	霧中の要撃	三一四

八〇	桑の植付と殖林の準備	三一九
八一	火事だ!	三二四
八二	放火犯	三二八
八三	細民救助の第一歩	三三三
八四	村治の根本的大改革	三四一
八五	天下の模範村	三四九

目次 (終)

鍬の光り

(一) 春の光

神が天地に春を送つた。即ち我等人間始め一切の生物に向つて、この美なる陽春の氣候を賜はつた。

感謝せよ、感謝せよ、我が國民は我が皇國の天照皇太神に向つて感謝せよ。

學者振るな、伶俐振るな、金持振るな、物知顔をすするな。唯總ての物總ての事に就いて感謝せよ、我が國民は我が皇國の天照太皇神に向つて日夕深く感謝せよ。

人間が神に勝てるか。或人は或人間の前に立つた時は、明かに自己の力の大きな事を發見するかも知れぬが、神の前に立つた時は、我が能力の如何にも薄弱なる事

堀内新泉著

を自覺せざるを得ないであらう。

春が来た、春が来た、神が我等に春を送つた。仰いで天に満つ此の陽春の麗日の光を見よ。俯して地に満つ此の陽春の偉なる恩恵を思へ！斯くの如き大なる作業が一日はおろか一時間でも人間業で出来るならば遣つて見よ。

つひ此の頃までこそ野に山に否、野山は言ふに及ばず家の内、爐にドン／＼と紅色の樞火の燃える四邊までゾク／＼と動いて居つた冬の寒さは既う何處へやら行つて了つて、灰色の空は何時しか麗かに青々と晴れ渡り、麥の緑に戦ぐ春風善人の寢息よりも和かく、水は温んで野は霞み、春日の光温として天地の間に満ち溢れ、有らゆる花の苔共は此處四五日急に景氣付いて来た春禽の聲に毎日毎日未だか未かと催促せられて少女の朱唇のやうに紅く色付き、今日などは餘りの暖さ長閑さに櫻までが既う遣り切れなく成つて頓に綻びかけた中に、憎や彼此に早五六輪拔駈して、生れ立ての赤兒の唇よりも和かさうな花片めが、さも嬉しさうに白く日光に光つて居る。

滿身春日の光を浴びて、大分道に疲れたらしい一人の旅人が或る山村に近附い

た。その旅人といふのは、年齢の比四十前後の好い體格をして居る男で、手織の袷に同じ羽織、古い茶色の帽子を被つて、何か小さな風呂敷包を負ひ、何れも古い股引脚絆草鞋穿、服装はいかにも泥臭いが、明かな眼に高い鼻、侮り難い容貌を具へて居る。田舎は何國も同じ事、一條の山川を左右から山が狭んで、その兩岸に田園あり人家あり、所々に森あり、神社あり、佛閣のある位のこと、外には別にこれと云ふ目新しい變化もない。

旅人は退屈したか歩きながら呟いた。

「今朝の三時に今治の旅宿を立つてから、確に最う十里近くの道を來て居るが、黄金村と云ふのは、まだこれから何位里程があるか知らん？」

言ひ／＼日影の加減を見ると日は最う既に正午に近い。空は微白く霞んで、春日の日の長閑さ暖さは何とも言へぬ。

(二) 黄金川橋

右の旅人は今日模範村中の模範村として天下に名高い伊豫國今治在の黄金村を尋ねやうと云ふのである。何でも早く其の村に行つて、親しく村の状態を見、早く其の大住孫兵衛と云ふ人に會つて、村を興した談話を精しく聽せて貰はうと樂しんで遣つて來たが、遠い／＼來ても／＼其の村に來着かぬ。

何しろ朝の三時から歩き通しに歩き、途中で腹が空つたので、午食に持つて來た握飯の半分は途中の山の中で今朝の九時頃に食べて了つた。それから又岨しい山道を幾度も登りつ下りつして、二時間以上も歩き續けて來たので、腹が空いて甚だしく氣力が衰へた。これからまだ一里もあると云ふやうな事では、到底も此儘向ふまでは行かれぬと思ひ、或る村で幸ひ人家のある所に出たので、帽子を取つて入口に近寄り、

「御免なさい、少々物を承はりたうございますが、黄金村と云ふ所まで行くには、これから未だ里程が何程ありまじやうか」

家人は皆野に出て留守だと見えて、七十前後の腰の二重に屈んだ、外背の紅く爛れた老婆さんが、色の青い顔を上げて、

「黄金村と云うても廣いが、何處まで行きなさるかな？」

「黄金村の惠比良と云ふ所まで行くのでございませうよ」

「左様かな、最うこれから十七八町も行きなさると新しい立派な橋がある。その橋を渡りや向うは最うお前さんの尋ねなさる黄金村の内ぢやが、惠比良まで行きなさるには、その橋からまだ彼で七八町近くもあるかな？」

「何うも有がたうございませう、こりやお邪魔を仕ました！」

また本の道に出で進みかけて見たが、腹が減つて足が進まぬ。何處にか聊て掛茶屋でもあるまいかと氣を附けて見ても、山家のことであるので、そんな所も見當らぬ。ポツ／＼と行く中に、向ふに一ツの森が見える。近附いて見ると宮がある。立寄つて拜殿に腰打掛け、握飯の残りを三ツ食べたが、何處に入つたやうにも無い。併し幾分か元氣が出て來た。

「サアこの勢で一刻も早く向ふへ行かう！」

足を早めて行く中に、果して川の頭に出た。川の頭に出て見ると、瀬の早い山川の流に田舎には珍しい立派な新しい木橋が架つて居る。

「ア、好い木橋ぢや！今日これ位な橋を架けるには、定めて何千圓といふ金がかかるぢやらう」

旅人は思はず橋の袂に立止つて、橋の様子を見ると云ふと、橋脚は三ヶ所も立派な切石で高く堅固に積み立てゝある。

「斯んな立派な橋は都會にも澤山見かけぬ」

感心して褒めながら、橋欄の柱を見ると云ふと、一方の柱には「黄金川橋」他の一方には「明治四十一年四月」と記してある。

「ア、好い橋ぢや！橋も斯んなに堅固に出来て居れば、何んな洪水が出てても大丈夫ぢやらう！この橋に比べると、家の村の龜川の土橋などは、まるで話に成つたものぢや無い！彼の川にも斯んな堅固な橋が出来たら、毎年水に流失れて、一年に必ず一度づゝ架けかへる憂ひが無くて、土地の人は夏冬ともに何んなにか助かるぢやらう！併し斯んな橋が一村や二村の力で架けられさうな筈は無い。けれども縣道にしては、これまでの道路は餘り悪かつたし、郡道か知ら……多分左様ぢやらう」

おもひ／＼二間幅もある厚い板張の立派な橋を向ふに渡り終ると、大きな御影石の柱が立つて居つて、「従是東黄金村」と彫つてある。

「ア、愈々来た！最うそんなに遠いこともあるまい」

旅人は喜んで進みかけると、橋から此方は道路が急に一變して、三間幅もありさうな大道坦々として砥の如く、斯んな山間に斯んな立派な道路があらうとは意外である。

(三) 村の入口

旅人は訝つた。

「まるで縣道のやうだ、イヤ縣道よりも立派ぢや！黄金村と云ふ所は、随分酷い山の中で、最う此の邊の行詰のやうに聞いて居つたが、この道路は全體何處へ通ずるのぢやらう？」

疑問を懷いて道の左方に近く寛々として下る黄金川の春水の聲を聞きながら

行々四邊の地形を見ると、兩山迫つて間に近く黄金川の流を狭み、川の左右の山には尺周位もありさうな杉の若木が蒼々と一面に茂つて居る。

旅人はこれを見て嗟歎した。

「ア、立派な山だ！此處最う十年も経つたら實に太した金に成るぢやらう！」

潺々と春を謳つて下る黄金川の流に添つて青い生々した杉山を川の兩岸に眺めながら、広い平な道を真直に二三町も進んで行くと、川の流が緩く一轉して右の方に廻る。それに伴つて道も亦右に曲り、川の兩岸の山も亦おなじ方向を取つて何處までも一望蒼然と杉の若木が茂つて居る。

「ア、太した山林ぢや！これ丈杉を仕立てるには、随分物も懸つたらうが、最う斯う成つて來ると、金の實る木も同じ事ぢや！」

旅人は足を止めて、兩山の更に新しい有望なる景色も見た。何でも早く此の村の再興者——大住孫兵衛といふ老人に會つて話談を聞きたいものだと思ひ、足を早めて五六町も一氣に進んで行くと、急に地形が一變して、今まで狭く川を間に狭んで居た左右の山が漸々に南北に開ひて、川の兩岸に田園見はれ人家見はれ、田に

は麥畑には桑南北の山には檜の若木が生ひ茂り、麓の方は段々に見事に耕地が整理せられて、一面桑を植ゑつけてある。

「ア、！」

何にも言はず旅人は唯歎じ、人家に近い田圃を見れば、麥の緑一際色濃く、其處彼處に村人が麥の中打つ鍬の光が暖かい春の日にびかり／＼と光つて居る。

川の兩岸の人家を見れば、いづれも新しい家ばかりで、今日を過しかねて居さうな家は一戸も見えぬ。

「好い村だ！何方を見ても何となく富んで居さうぢや！」

旅人は又足を止め、さも羨しさうに川の左右に在る二ツの村を見渡すと、雞犬の聲豊に聞えて、春の光が満ちて居る。

「さあ行かう、早く行かう！恵比良と云ふはまだ餘程あるか知ら？何處かその邊の家に寄つて聞いて見やう」

少し進んで行くと、幸ひ家の前に出た。帽子を脱つて入口に近づいて見ると、此家では今四五人の家族が野から歸つて、これから午飯を食べやうと云ふ所らしい。

旅人は丁寧(ていねい)に、

「少々物を承(うけたま)はりたうございませすが、惠比良(えびら)と云ふ所(ところ)はこれからまだ何程(なんぢやう)ございませしやうか」

此家(こゝ)の主人(しゅじん)らしい五十近く(ごじゅうちかく)の男(おとこ)が、頬被(ほかぶり)を脱(と)つて慇懃(いんげん)に、

「惠比良(えびら)も所(ところ)に依(よ)つては最(も)う直(ちか)でございませすが、惠比良(えびら)は何方(どなた)をお尋(たず)ねになるの
でございませすかな？」

「大住(おほすま)孫兵衛(まごべゑ)さんと云(い)ふお方(かた)の……」

「ア、大住(おほすま)さま、大住(おほすま)さまをお尋(たず)ね成(な)さるのでございませすか。それならば此(こ)の道(みち)をば真直(まっすぐ)に二三町(ちやう)もお出(い)でになりませすと、新(あたら)しい石橋(いしはし)がありませす。その石橋(いしはし)から向(むか)ふは黄金村(おうごんむら)字(あざ)惠比良(えびら)の区域(くわい)になるのでございませすが、唯(ただ)今(いま)お尋(たず)ねの大住(おほすま)さまのお宅(たく)は、その石橋(いしはし)を渡(わた)つて一町(いちやう)ばかりお行(い)でに成(な)りますと、道(みち)の右側(みぎがは)の桑畑(くわだち)の中に大きな家(いへ)が見(み)えるでございませす。それが大住(おほすま)さまのお宅(たく)でございませす」

主人(しゅじん)は屢(しばしば)腰(こし)を屈(か)めて、まるで神(かみ)の名(な)を呼(よ)ぶやうに大住(おほすま)さまの名(な)を呼(よ)んで旅人(たびん)に道(みち)を教(おし)へる。

(四) 郡長(ぐんぢやう)の添書(そんご)

旅人(たびん)は厚(あつ)く禮(れい)を述(の)べて去(ま)つた。去(ま)つて本來(もと)た道(みち)を二三町(ちやう)も進(すす)むと云(い)ふと、果(はた)して「惠比良(えびら)橋(はし)」と云(い)ふ新(あたら)しい立派(りっぱ)な石橋(いしはし)の所(ところ)に出(い)た。

「ヤア愈(いよいよ)來(き)たな！」

旅人(たびん)は喜(よろこ)んで橋(はし)から一町(いちやう)ばかりも行(い)くと、後方(うしろ)に近(ちか)く見事(みごと)な杉山(すぎやま)を控(ひか)へて、廣(ひろ)い桑畑(くわだち)の中(なか)に大(おほ)きな土藏(どそう)の三棟(さんたか)もある、立派(りっぱ)な門構(かどがま)の家(いへ)がある。旅人(たびん)は往來(わうらい)からこ
れを望(のぞ)んで、

「ヤア彼處(あそこ)だな！早速(さつそく)尋(たず)ねて見(み)やう。何(なん)うか家(いへ)に居(ま)らるれば好(こ)いが！」

往來(わうらい)から右(みぎ)に曲(まが)つて、桑畑(くわだち)の間(あひだ)にある廣(ひろ)い平(たい)な道(みち)を進(すす)みかると、門(かど)の内(うち)から五(ご)六人(にん)の男(おとこ)女(め)が何(なん)れも鍬(くわ)を擔(か)いで、何(なん)か話(はな)し、此方(こゝ)に出(い)て來(き)る。一同(いっどう)は既(すで)に午飯(ひるめし)を食(た)べて、これ(こゝ)から又(また)春(はる)の野(の)に出(い)て稼(かせ)がうと云(い)ふのであらう。旅人(たびん)は出合頭(であひがしら)に帽(ぼう)

子を脱つて、

「大住孫兵衛様の御宅は此方様でございませうか」

「はい、左様でございませう」

一同は丁寧に答へて行き過ぎた。旅人は門を入ると、農家は何國も同じ事前に
廣い庭がある。

旅人は飛石を渡つて入口の前に立ち、

「御免下さいませ」

「はら」

答へて十八九の美しい娘が出て来た。旅人は丁寧に一禮して、

「私は遠國から態々お尋ね申したものであります、御隠居様はお宅さまで居ら
っしゃいますしやうか」

「少々お待ち下さいませ」

娘は奥に入つて行つた。

「直に會つてくれるか何うか」

旅人はびか／＼と艶光する襦袢の上框に腰かけて待つて居ると、程なく奥から年
齡の比最早七十ばかりの、いかにも福々しい相貌をして居る、まだ健康さうな老人
が見はれた。

旅人は一目見るより敬意を表し、

「ア、此の人か、成程好い相貌をして居られる人だ！」

早くも其の人の徳に撃れて、旅人は急に上框を離れて土間に立ち、覺えず頭を低
げて何にも言ひ得ぬ。

老人は和に、

「お出でなさい、お前さまは何方から？」

「はい、何うも突然お伺ひ致しまして！」

言ひ／＼懐中から一通の添書を出して老人に渡す。老人は受取つて差出人の
名を見ると、當郡の郡長からの添書だ。開いて見ると、先づ時候の挨拶を述べて、

「この人は豊後國の加藤某と云ふ人で、これから或る村の村長に成つて、大いに働
きたいと云ふ人であるが、今回その郡の郡長の紹介状を持つて當郡役所に見え、更

に小生より貴下に紹介して貰ひたい。要するに貴下にお目に懸つて、何うか貴村再興の次第を備に承はりたいとの希望である。國家の爲に誠に慶ばしい思立であるから、何うか十分御指導を小生よりも願ひたい云々」とある。老人は旅人の來意を諒して、
「それはまあ遠方態々この片田舎まで好くこそお越し下さつた！ さあまあ何うかお上り下さい。オイ、誰ぞ居らぬかな」

「は、」
直に答へて、また以前の美しい娘が出て來た。

老人は振向いて、

「お客さまに御洗足のお湯が無くば水ありとも」

「は、」
旅人は手を振つて、

「イヤ、それでは却つて恐れ入ります！ 幸ひ前のお庭先を清麗な水が流れて居るやうに拜見致しました。誠に恐れ入りますが、何うかお古いお下駄でも一足

拜借致したら存じます」

「ぢやア左様した方が、お客さまは却つてお氣安いかも知れぬ。ぢやア三津や下駄を出してお上げ申せ」

(五) 初 對 面

祖父の言に娘は早速一足の下駄を出した。

「何うかこれをお召し下さいまし」

「有がたうございませ、それでは一寸失禮を致します！」

旅人は下駄を提げて、前の庭先の間幅もありさうな小川の頭に向ふ。老人は掬頭に出て、物の蔭から其の人の舉動に注意を怠らなんだ。

旅人は小川の流に臨んで見ると、清麗な水が豊に流れ、大きな鯉や鮒などが群を爲して泳いで居る。

「ヤア！」

旅人は驚いて、珍しうにこれを見たが、やがで草鞋を脱いで土を拂き、緒と緒とを結んで置いて、次には足袋を脱ぎ、埃を拂つて重ねて置き、今度は脚絆を解いて、これも亦た埃を拂ひ、左右を重ねて中に足袋を入れ、緒で小さく捲いて置き、次に羽織の埃を拂ひ、帯を解いて同じく着物の埃を振ひ、帯を締めかへ、股引や裾を捲つて手を洗ひ、顔を洗ひ、嗽をして、次に清潔に足を洗ひ、水を十分に拭き取つて下駄を穿き、最後に手拭を洗つて搾り、歸りに低い柿の木の枝に干したが、風を怖れる用心か、端と端とを小さく結び、片手に草鞋、片手に脚絆を持つて歸り、歸りは何時でも間に合うやうに、上框の下に草鞋を向ふむきに整然と揃へ、その上に足袋を脚絆に巻いたのを横に置き、手を拂いて始めて座に上つたが、その間の時間は十分懸らなかつた。

老人は笑顔を見せて客を迎へ、

「さあ、何うぞ此方へお通り下さる」

「イヤ、最うこれで……」

謙遜る。

「此處には又時々人も参ります、何うか此方へお來しを願ひます」

「左様でございまするか、それでは御厚意に従ひまして……」
老人は次の八疊の間を通り越して、奥の十疊の座敷に通した。

「さあ、何うぞこれへ」

席を示して老人は座を占めた。

客は飽くまで老人に敬意を表して上座を避け、

「エ、初めてお目に懸ります、私は豊後の者で、加藤武三太と申すものでござりまする、今後何分宜しく御指導を仰ぎます」

此方は老人、これも亦懇切に、

「エ、初めてお目に懸りまするが、愚老が孫兵衛でござります、遠方態、よくぞお尋ね下さいました！」

客は未だ手を上げず、

「エ、實は疾うからお名前承はつて居りました、是非一度お伺ひ致して、いろいろ御示教を仰ぎたいとは存じて居りましたが、一は遠國の事ではあり一は又御多用の所、突然伺ふのも如何と存じ、旁々延引致して居りました、ございませ

するが、今度是非ともお目にかゝつて御垂教を仰ぎたい必要が起りましたので、ま
あ色々の手績を致した上、御當郡の郡長様の御添書を頂きまして態り出でました
所、折好く御在宅で早速御面會下さいまして、この上の満足はございません！」

至誠の情面に溢れて、その一言々々に温い血が通つて居る。

人を観る目の鋭い老人、
「篤實な人ぢや、この人ならば話甲斐があらう、自分の知つて居る丈の事は快く話
をしやう！」

直ちに宥して隔心なく、

「イヤ何う致しまして、遠方態にお尋ねに預かりまして却つて恐縮致しまする！
御覽の通りの田舎老爺、何もこれと云ふ取柄はございませんが、愚老の知つて居る
丈の事又は親しく経験して居りまする丈の事は何よりも、お話を致しませぬで
ございませしやう！」

「何うも有がたうござりまする！」

初めは火鉢次にはお茶を前の娘が持つて來た。

(六) 中 食

孫兵衛老人は客に茶を薦め、

「エ、今日は何方からお出でに成りましたな？」

「今治から参りましたでございます！」

「ホウ大分お早くお着きに成りましたな！」

「今朝の三時に彼地を出發致しまして！」

「それは嘸お疲れでございませしやう！御覽の通りの難道でな！」

「御當地から今治までは幾里位里程がございませしやう？」

「昔から七里だと申しますが、幾干か延びて居るやうでございませ！」

「ア、左様でござりまするか、途中で途を取違へましたので、それ故豫定よりは大分
おくれましてございませ！」

「それは定めて御難儀でございませたらう。エ、貴下御中食は？」

「はい、エ、途中で辨當を使ひましてございます」

「山道を七里もお歩きに成つちや、失禮ながら辨當腹じや定めてお腹がお空になりなりましたらう！イヤ最う御覽の通りの山間で何も差上げるやうな物はございませんが、愚老も丁度今他から戻りましたばかりの所で、これから午飯を食べやうと思つて居た所でございます。何うか貴下も御一緒に」

話して居る所に娘が急須を盆に載せて持つて來た。老人は莞爾と、

「これは愚老の孫女でございます」

「ア、左様で居らっしゃいますか」

「この御仁はの大層御遠方からお尋ね下さつた御仁ぢや！」

「ア、左様で居らっしゃいますか」

娘は客と初對面の挨拶をした。

「今朝の三時に今治をお立ちに成つて、只今お着きに成つたのぢや、何は無くとも早くお中食を差上げる事にせい、愚老も大分腹が減つた、副食は漬物でも關はぬから早く此處に持つて來い」

「はい」

「今日は生憎誰も居らんでのう」

去らんとする娘を客は呼び止めて、

「これは私の郷里で出来る餚でございます、眞個の少々ばかりながら、お土産のお記念に持つて出ましてござりまする」

「それは何うも有がたう存じます！」

老人も語を添へて、

「それはまあ御親切に有がたう存じます、さア何うかお平に！」

まるで舊知の人のやうである。その言語その容貌の和さ温さに接して客は我が親にても會つたやうな思ひがする、此方も自然と打解けて、

「實は私は一度親しく貴下様にお目懸りまして、いろ／＼御指導を仰ぎたいと存じまして、遠方態々上りましたやうな次第でござりますが、御都合は如何さまでございませう、今日これから少々お邪魔を致ししてもお差支はござりませうか」

「宜しうござる明日の夕方には是非とも他に出かけなければならぬ用事があります。只今の所では別に差支はありませぬ、好い所にお尋ね下さつた」

「それはまあ偶然にも好い所に伺ひまして！」

客は喜んで、はや話を始めやうとして居る所に娘が早速中食のお膳を拵へて持つて来た。

(七) 決心と準備

「何にもございませぬがさあ何うか、愚老も此處でお陪膳を致します」

「それでは早速頂きます」

麥飯に副食は里芋と筍の煮染、後は漬物と云ふ極めて質素な饗應ではあるが、流石は一村を興した人の家庭程あつて、萬事に善く注意が屆き、まだ世馴れぬ處女の手に依つて俄に調へられたお膳の上にも、一點批難すべき個所がない。客は萬事に満足して腹を満し、

「何うも御馳走さまに成りました！」

老人は少し後れて箸を納め、

「明日親類供に慶事がありますので、今日は老婆や忤の家内が其の方に朝から手傳に行つて居りますので、何のお構ひも出来ません、併しまあ何うか御ゆつくり」

「有がたうございます！エ、御家族様は餘程大勢さまで居らつしやいますか」

「愚老等夫婦に忤夫婦、孫が三人居ります、只今宅に居ります彼の娘の弟は縣の中學校に參つて居り、その次はまた村の小學校に通つて居ります。忤は毎日村役場の方に殆ど詰り切りで、偶にしか家へは戻つて參りませんので、不慮は一家五人暮を見たやうなものでございます。勿論外に男女四五人の雇人が居りますので、その指圖はまあ愚老がして、忤の家内や娘も毎日雇人と一緒に野に出て稼ぎますので、晝間は老婆一人で留守居をして居るやうな譯でございます」

「この人にして未だ野に出て働かれるか」

客は感じて、

「ア、左様で居らつしやいますか」

外には何と言ひやうも無い。

徳のある人は何うしても違ふ。山に美玉あれば草木爲に潤ふで、客は此の老人の言を聞き、その容貌を見れば見る程何となく懐かしい。つまり客は老人の徳に撃たれて、言はんと欲する事も急に口に出なく成つたが、一刻も斯うして居つては成らんと思つて、終に談話を肝腎な問題に進めた。

「エ、今回私が遠方態々貴老さまをお訪問致しましたしのは外でもござりませぬ。有體をお話致しますれば私の郷里の村は、近頃太く衰微致しまして、この儘に棄て置く時は村民四方に離散する外は無運命に差迫つて居ります。村長の如きも最早幾度と無く變りましたが、一年として其の職に居付く人がありません。それも其の筈、實に非常なる難村で、村民は一般に財政に窮迫し、風儀は紊れ人氣は暴く、實に手の着けやうがありませんので、村は益々非運に陥いる一方でございます。すー」

「成程！」

老人は熱心に耳を傾けて聴く。

「それでまあ今度村内の五六人の有志者が相會して、この際何とかして村政の革進を計つて一村の無事に立行くやうにしなければ成らん。それには先づ村治の衝に當る村長に確乎した人物を得なければ成らぬ。誰が好からう彼が好からうと詮議の結果、諸方に交渉して見ても誰一人として應じ手の無い所から、終に其の邊の相談が圖らずも私にあつたやうな次第でございます」

「フム！」

「けれども私はそんな難局に立つて難事を縦横に處し得るやうな知慧も能力も無い者でござりまするから、再三固く辭退致しては見ましたなれど、村内の熱心なる有志者が容易に容してくれさうにもありません。併し此處は私も考へもので、有志者に攻められる一時の苦し紛れに村長の職を汚して他を欺き、自を欺くやうな事は出来ません。苟しくも一度引受けたからには、身を碎き骨を粉にしてなりとも、村治の功績を擧げぬ事には第一世間に對しても濟まず、また我が良心もゆるしません。それ故に愈々これを引受けまするには、充分なる決心と準備とを有つて懸らなければ成りません。それ故先づ愈々有志者の切なる勸告に従ふに先立

つて、貴老様のやうな御實驗家にお目に懸つて、この際探るべき村治の方針をも御指導に預かり、第二には貴老さまの御當村をお興しに成つた御苦心談などを一通り承はつて、今後の参考に致したいと存じまして、實は遙々伺ひましたやうな次第でございます。

(八) 村長に成れ！

「イヤそれは何うも恐縮千萬前にも御話申した通り、遠方態々お尋ね下さつた甲斐も無く、別にこれと云つてお話を致す程の事績もございませんが……」

「何うか左様仰せられずと、不束ながらも私が、今後其衝に當つた後、第一に心得置くべき事、並びに其の大體の方針に就いて、是非とも御垂教をば仰いで歸りたいのでござりますす。」

言語明晰、體度整然、而も熱烈なる至情が眉宇に満ち溢れて居る。

老人は又思つた。

「好く話の分りさうな人ぢや、意思も強さうぢや、身體も丈夫さうぢや、注意力にも富んで居れば、第一篤實さうな人ぢや、この人物ならば相當な活動が出来るぢやらう、好い同志を得て頼もしい！」

猫には小判の價は分らぬ。何うしても人物でなければ人物の價値は知れぬ。

流石は一村の運命を困難の中から救ひ上げた程の老人、略その人の價値を見て取つた。

「其處で何うでございますか、貴下の御了簡は？ 好い方針が立つならば遣つて見やう、さも無いならば先づ見合せやうと云ふやうなお考へでございますか？」

老人は先づ其の決心を問ふらしい。

「道理ぢや！」

客は直に其の意を諒した。

「イヤ、これには少し仔細もある事でござりまするが、私は何も他に浮いた考へがあつて村長の職に就かうなど、云ふのではありません、この際困難とか障礙とか云ふやうな事は一切思はず、假令道なき所にも道を求めて、我が一身一命を捧げ

て出来る事ならば、何うかして我が村の今日の非運を救つて、畏れ多くも我が陛下の善良なる民として、自他共に人間の踏むべき道を踏みたいと思ふのでござります！併しながらそれに先立つて、貴老さまの如き御實験家に親しくお目に懸りまして、御指導を仰ぐ事は大切な事だと存じまして、實は今回伺ひましたやうな次第でござります！」

老人は強く點頭いて、

「イヤ其の御決心と其の御熱心とがあれば、大丈夫事は成就するに極つて居ります。誰の話も聞くまでも無い事ぢや、只今貴下の仰有つた事業に對する困難とか障礙とか云ふやうな事に屈せず、我が一身一命を擲つて、假令道なき所にも道を求めて飽くまで御盡しになる御決心ならば、多寡が一村の御革新位はおるか、何んな大事業でも世に成就せぬ事はありますまい。何方様に就いてお聞きに成つて見た所で、世にそれ以上の方法はあるまいと思ふ。既にその決心と御熱誠とのある以上は何をか恐れんぢや、一日も早く村長の御職にお就きに成つて、一村の爲に、イヤ我が國家の爲に御盡し下さい！ア、今日は何なる吉日やら、實に近頃愉快なお話を承はつて満足でござる！」

客は靜に老人の話を聞いて、兩手を下げ、

「イヤ實に恐縮致しました！とは申すもの、其の邊の消息にはまだ何分にも經驗の無い私、今後の心得ともなるべき事を、何うかお授け下さるやうに願ひたいのでござります！」

「イヤそんな御心配は御無用かも知れん！早い話が何んな大事業を遣られた人でも、初めから十分の經驗を有つて懸つた人は恐らく無いかも知れませぬ。總ての事を成すには、第一は決心、第二は熱心、この二ツの要素さへ具へて居やうならば、經驗の如きは直にも得られる。經驗が無くて出来ないやうならば、人は何にも出来さうな事はない。人は斷乎たる大決心と、不撓不屈の熱誠さへあらうならば、經驗は時々刻々に出来て来る。これに反して決心と熱誠を缺いて居る者であれば、何時まで同じ事を繰返して居つても、眞の價值ある經驗は得られるもので無い！」

(九) 難村の難務

老人の言ふ所はひしくと胸に徹へる。客は益々斯翁に對する尊敬の念を強くせざるを得ん。

「何うも色々有がたうございますア、好くこそ私は貴老のお側に伺ひました！ 以上のお言を承はりました丈でも最う十分四國まで參つた甲斐はありましたが猶この上の御指導を是非とも仰いで歸りたいと思ふ心が已みません！ 何分にも事を成し能ふ要素を缺いて居る私何うか御憐察下さいまして！」

老人は少し顔色を悪くして、

「ぢやアお前さんは俺には村長が勤まるか勤まらんか分らんと自分で自分を疑ふのでがんですかい？ それぢやア肝腎な決心は無い譯ぢやない！ 自分で自分を疑ふやうな不確實な自分であれ他人が我を信じさうな筈はない。これに反して、自分が確と自ら信じ能ふ所の我であれば他の人も亦我を信ずるに極つて居る。自分で自分を怪しく思ふやうならば寧ろ初めから村長などには成らん方がよい。自分で自分を信用することの出来んやうな不確實な人間を何で村民が信用するものか。凡そ一村の人の長にでも立たうと云ふ者は、一村の人に心服せられ無ければ思ふ存分の仕事は出来るもので無い。たとひ就職當時は信用せられんでも、行々は村民をして十分に我に心服させるやうに仕向け能ふ位の人間で無ければ到底村長として活動する譯にやア行かん。まあ早い話が左様ぢやござらぬか」

「イヤ大きに全く左様でございまするな」

老人は少し強い言語を食はせて相手の顔色が變るか何うか密に注意して見ても、客は少しも顔色を悪くせず、善言は善言として喜んで聽いて居る。老人は心中で點頭いた。

「ア、立派な人ぢや、眞に道を求める人ぢや、忍耐力も強ければ、服従の精神にも富んで居る。この人の前半生は何う云ふ事をして居つた人であらう？ 一通り物も出来さうぢや、人品も卑しく無い、第一身體の姿勢が勝れて立派ぢや！」

客は更に語を起して感謝した。

「何うも色々な御教訓、辱なく存じます！ 以上の御言は幸ひに好く理解致しました。難村の難務を處理するには、如何なる心懸、如何なる順序、また如何なる準備を有つて着手致したならば宜しうございませしやうか」

「ハ、ハ、ハ、」
老人は笑つて俄に顔色を和げ、

「それは貴下愚老に聞かんでも、貴下自身に好く知つて居なさるぢや無いか。ただ知つて居なさるばかりで無く、貴下自身に常に好く行つて居なさつたぢや無いか」

「は、ハ？」

「ドレ、貴下の掌を出して見せなさい、何も愚老は人相家ぢや無いがな」

老人の言ふが儘に、客は鐵板のやうな兩手を開いて、いかにも整然と老人の前に出す。老人は凝然と見て、

「ホウ、貴下大分農業も今日遣つて居なさるな」

「はい、左様にござりまする」

「貴下はいかにも凡帳面な人で、負債などは一文も無いな」

「はい、左様でござりまする」

「宜しい、早くお歸り成さつて、村長の職に就いて、一村の爲に、否、我が日本帝國の爲

めに十分お盡し下さい！ 貴下は今事を爲す順序とか準備とか云ふやうな事をお尋ね成さつたが、唯今も申した通り、貴下は最う其の邊の事は整然と知つて行つて居なさる」

「所が私には其の邊の事は、全然別らぬのでござりまする。」

「イヤ、左様でない、今日の若い人は、概して道理にかけては明い、が實際の上には皆無學ぢや！ 然るに貴下は左様でない。理論には暗いかも知らんが、實際の上には明い人ぢや、失禮ながら愚老は既う貴下に就いて明白にこれを見た！」

(一〇) 至誠の情

客は凝然と首を拈る。

「ハ、ハ」

老人は笑つて、

「何か心付きましたかな？」

「イエ何うも分りません！何故左様な事を仰せられるのでござりませしやう？」
「ぢやア愚老のお見受け申した所を言ひましやうか」
「はい、何うか仰有つて見て頂きたう存じます」

「ハ、」
老人は又笑つて、

「斯んな山の奥であるが、近年愚老の所に訪ねて見える人は、月に三人や五人でない。其等の人達は皆何んな事を聞くかと云ふと、老爺さんお前は何うして此の村を斯んなに繁昌させたか、村の戸数は何位ある、人口は幾干、耕地は何丈など、皆同じやうな事を聞いて歸るが、この村に百度来て、そんな事を聞くばかり聞いた所で、何の役にも立つまいと思ふ。愚老はそんな閑人の見える度に、斯んな山奥までそんな下らん事を聞きに来る暇で、荒地の一段も掘起して桑でも植ゑなさいと云ひたくなる。併し初對面の人に向つて無闇にそんな事も言へるので、愚老は眞面目に問はれる程の事を答へて返さねば成らんが、その都度餘り嬉しい思ひはしません」

「成程、左もありさうな事ぢや」

客は此の勤勉なる老人に對して氣の毒に思ふ。老人は三日月形の眉を昂げて、「そんな人に限つて美麗な着物を着、香氣の高い巻煙草などを喫して居る。愚老は其の都度心に思ふ。そんな贅澤な眞似をして貴重な金や時間を濫用徒費するやうなものに、何うして村治の功績などが擧げられるものか。またそんな閑人に限つて、人の所を訪ねて、人に物を聞く作法一ツ心得て居らん。そんな不注意極まる人間には、何んな事を話して聞いた所で分りさうな事はない。まして實際に行はうなど、は思ひも寄らん事ぢや、何と加藤さん左様では無いか」

「はい、はい、大きになッ！」

「所が、貴下は左様で無いよ。今日貴下が初めて此處に見えた時に、ア、注意深い人ぢや、用意の好い人ぢや、この人ならばと、實は愚老は感心しました！貴下は太く謙遜つて、私は無能なものぢやとお言ひなさるが、中々以て左様でない。貴下丈の注意があり、用意があれば、愚老などに何をお聞きなさる必要もありません。貴下が若し最初にお話のあつた通り、確乎たる決心と、不撓不屈の熱心とを以てお遣り

なされる上は、今に貴下の村は遠からずして榮えることでありましやう。まあ何うか國家の爲に貴下のやうな仁に一骨折つて頂かねば成らん」

「太く自分の事を褒めるやうだが、客は何だか合點が行かぬ。」

「何うして左様云ふ事を仰せられますか、私には少しも合點が参りませんが……」

「ぢやア愚老が今日貴下に就いて、圖らずお見受け申した所をお話しましやう！世間多數の人が愚老の所に見えた場合には、そりや最う愚老は此の通り、何一ツ長所のない田舎育ちの者ではあるが、大概の人が頭から田舎漢だと輕蔑つて横柄に出かけ、物を聞きに来たのやら教へに見えられたのやら一向分らん。それもまあ可とした所で、直に手帳など出して、巡査が物を尋問するやうな鹽梅式に尋ねる。所が貴下は初めてお目に懸つた時から左様で無い。實に此方の痛み入る程御律儀で、實に早何とも恐縮しました。ハアこれは中々着實な仁ぢやな、成程この人ならば衷心から村の事を案じられるであらう。また斯う云ふ眞面目な人であれば、必ず村治の目的を遺憾なく達せられるであらうと云ふ感じを愚老にお興へに成つた。先刻お話を承はれば、御村方の有志者が貴下を難村の村長に御推薦なさる

と云ふのは是れ恐らく偶然な事ではありませぬ。斯やうに申せば、色々貴下を御品評するやうで失禮に涉るかも知存じませぬが、貴下のお顔やお言語には、何うかして我が村を繁昌させたいと云ふ至誠の情が溢れて居る。その御熱心があるからには大丈夫、貴下が村を御支配になれば、村民自然と歸服して、今に必ず榮えることと受合でございます」

(一一) 注意の人

客は靜に頭を下げて、

「何うかして今日の我が村を救ひたい、救つて更に繁昌させたいと云ふ念願ばかりはお察しの通り胸に充滿ちて居ります」

「村を興す原動力としては、それが最う何よりでござります」

「併し其の外には、前にも申した通り、何の長所も無い私重ねて伺うのも恐れ入ります、何卒村政革新の御指導を仰ぎたいのでござります！」

「愚老の狭い経験に據れば、決心に熱心、手順に準備、これが何より大切かと思ひます」

「何うか其の邊の消息を最少し精しく御漏し下さる譯には参りますまいか」

「それは最う貴下は整然と御存じぢや！」

「イヤ全く以て！」

「でも愚老は今日貴下に就いて實見しました」

「私に就いて？」

「いかにも左様でござる！」

「それは何う云ふ事でござりましたらう？」

「外でない。貴下が今日初めて家に見えて、前の流に足を洗ひに行きなされた時

でございます」

「その時私が何う致しましたでしやう？」

「眉を顰めて老人の顔を見る。」

「愚老は實に貴下の御注意深いのと、御用意の好いのに感心しました。萬事彼様

云ふ工合にお遣りになれば、何事も必ず成就致すでございませう」

「彼の時自分は何うしたらう？」

「客は凝然と考へて見る。けれどもそんな人に褒められるやうな事をした

覚えはない。老人は笑つて、

「成程貴下御自身には別に變つた事もしなかつたと思ひなされるかも知らんが、愚

老には實に貴下の所作が、ア、此の人は注意深い人ぢや、用心の好い人ぢやと云ふ

感じをお與へに成りました。貴下は其の時何う成されたかと云ふと、我れ故に他

の手を煩はす事をお避けに成つて、自分で下駄を提げて前の小川の頭にお出で成

さいましたな」

「はい、いかにも左様でござりました」

「それから水の中の何物をか御覽に成つて、太く感心成さつた御様子でしたな」

「いかにも左様でござりました」

「それは先づ好いとして、初めに先づ草鞋を脱いで土を拂き、これは最う穿き古し

の不要な物ぢやと思つて他に取棄てられぬ御用心か、但しは又何時でも間に合は

せると云ふ御用意か、緒と緒とを結び合せて置き、次に足袋を脱いで埃を拂いて、これも亦散亂せぬやうに重ねて置き、次に脚絆をお解きに成つて、おなじくこれも埃を拂ひ、左右を重ねて中に足袋を包み、緒で小さく巻いて置いて、次に羽織の埃を拂ひ、帯を解いて今度は着物の埃を拂ひ、帯を締めて衣紋を繕ひ、それから股引や裾を巻いて、先づ手を洗ひ顔を洗ひ、漱を成さつて、次に清潔に足を洗ひ、足の裏まで十分に水を拭き取つた上で下駄を穿き、最後に其の手拭を洗つて搾り、お歸りがけに低い梯の木の枝にお干しに成つたが、風に散らぬ御用意から手拭の端と端とを小さく結んで置き、片手に草鞋、片手に脚絆を持つてお歸りに成つたが、お歸りには何時でも他の手を煩はさずに萬事ともに間に合ふやうに上櫃の下に草鞋を向ふむきにして、整然と揃へ、その上に足袋を脚絆に巻いたのを横に置き、手を拂いて始めて座にお上り成されたやうにお見受け申したが、その間の時間は十分懸らなかつたやうに存じます」

「些細な事にまで嚴重に注意せられる人ぢや！成程斯う云ふやうな細い事にまで氣の着くやうな人でなければ、將に死せんとする一村の運命に生命は與へられんであらう！」

客は驚いた、感じた、而して何にも言へなかつた。

(一一一) 農民の軍服

客は度胸を脱かれて何にも云へず、手持無沙汰な顔をして居ると、老人は更に又語を次いで、

「世間多数の人は小事には心を用ひぬ。併し小事に氣の着かぬやうな人間に、大事の出来さうな事はない。然るに人間は何人も大事を爲す場合は少いが、小事は毎日何人も是非ともこれを成さねば爲らぬ。それ故に其の人の性格や人格は日常の小事の上に最も好く見られる。精細に申せば人間は、一足の足駄や一足の草鞋を脱ぐにも、その脱方穿方に好く其の人の性質が見られる。例へば不斷心の引締の無い人間であれば、必ず下駄の脱方までが粗漏である」

「はい、如何にもなッ！」

客は心から嗟歎して老人の話に耳を傾ける。老人は客の聴振に満足して喜んで談ずる。

「所が貴下の遣方には、一寸足を洗ひなされるにも順序あり、規律あり、準備あり、用意あり、實に愚老は感心しました！」

「お褒めに預かりまして恐れ入りまするが、何も深く考へて遣つた事ではありません。お話を承はりまして、平生の我が不用意を深く恥づる次第でございます」

「イヤ、左様でない、貴下は性來美性を有つて居られる上に、年少の御時代から何でも勝れて紀律正しい生活を成さつた仁のやうに愚老はお見受け申すが何うでございますいな？」

客は老人の眼力の鋭さに驚いて眼を見張る。

「成程この人ならば、一村の運命を救ふ位の事は何でも無かつたらう」

心竊に又嗟嘆した。

老人は更に又、

「初めてお目に懸つたが、貴下は實に謙讓の徳に富んで、よく人間の禮儀を辨へて

お居でになる。何でも無い事のやうであるが、貴下は先刻羽織や着物の埃をお拂きに成つて、帯を締めかへ衣紋まで繕ひ、萬事整然と成さつた上で、初めて愚老にお會ひ下さつた。何も汚い愚老のやうな老爺ぢやから、埃だらけの着物でお會ひ下さらうと愚老はお咎め申しはせぬ。また貴下としても、お差支は無、譯ではあるが、併し相手に依つては大層心持の違うものである。物事に好く心の行き届く人と云ふのは、即ち貴下のやうなお仁である」

「イヤ、恐れ入りまする！」

今日初めてお目に懸つたばかりで、愚老が貴下に就いて、深く感心をした事が外に今一事ござる。序にお話を致し文するが、他の人とは違つて極めて質素な御服装を成されてお來し下さつた事でござる。凡そ一村の危急でも救はうと云ふやうな大任を以て自ら任ずる所の人は、萬事に質素を以て旨とせなければ成らぬ。愚にも時流を追うて虚榮の愛に憧れるやうな人間には、到底地方農村の進歩改善などは望まれぬ。何と加藤さん左様ではござらぬか。我々農民の生命は口に不味物を食ひ、身體に汚い着物を着、而も鐵鎌を執つて、大いに勞働する所にござる！」

「實に仰せの通りでござります！」

「我々農民から以上の三ツを取去つて御覽なさい、農民の農民たる貴い價値は何處にござりまするか」

「いかにも左様でござりますなッ！」

「なア、襦袢は農民の晴衣である、軍服である、昔ならば緋威である。これを忘れて我々農民が絹布を身に纏うた時は、手に鉄鎌の武器が取れぬ。手に銃剣を取らぬ軍人に軍人の働きが望まれますか」

「仰せの通りでござります」

「愚老は貴下の其の質朴な御服装に何を隠さう惚れ込んだ。貴下は實際至誠を以て我が村を、イヤ我が國家をお憂ひになる仁ぢや、失禮ながら我々の有力なる同志ぢや！この伊豫の山奥の古老爺は、我が満腔の赤誠を捧げ盡して貴下を尊敬し、貴下の大なる前途を祝福致します！」

客は両手を正しく膝に突いて差俯向き、今にも落ちんと感涙兩眼に充ち溢れる。

(一三) 村治の情況

「ハ、」

氣骨ある老人は豊に笑つて、

「イヤこれは初めてお目に懸つて、色々下らん事をお聞かせ申して相濟ませぬ、何かまあ御勘辨下さいまし！」

「イヤ何う仕りました、圖らず色々有益なるお話を承はり、實に斯やうな嬉しい事はござりませぬ！」

老人は微笑んで、

「嘸かし御迷惑さまで……併し加藤さん今日は民力涵養など、云ふ聲が大分盛に成つて來たやうでござりますが、その施設者に何うも未だ然るべき人物が、いづれの地方にも餘り多くないやうでござりますな」

客は黙して點頭いた。

「貴下もまあ遠方へお訪ね下さいましたが弊村の如きは未だく萬事これからで、今日の所では何一ツ此處と云ふ勝れた點もございせんが、それでも何う云ふ事が誤つて世間の噂の種になりましたものか、近年諸方から此の村の村治の状況をお取調べになるお仁が續々お見えになりますよ」

「はい」

「所が其等の有志方は、何れも皆立派な洋服でもお召しに成つて、中には黄金襟の鼻眼鏡などをお懸けに成つた立派な仁も少からずお見えになります。さうして何れもく、外形上の事はばかりお聞きに成つて、ア、左様が、ウン能く解つたと云つたやうな體でお引取になる。ハ、實に呆氣ないですな！何の爲に此の山奥までお見えに成つたんぢやらう、餘りに不親切極まる人達ぢやと、時には腹の蟲めが頭を持ち上げるやうな事も全く無いでもございせん。近い例を申しさすと、昨日の事でした、矢張り一人のお壯い仁で、立派な洋服を召して金時計でも懸け、實に美しく扮装つた、彼が青年紳士とでも申す式の人でございしやうか、突然私供にお見えに成りまして、碌々時の挨拶もなさらずに手帳をお出しになり、例に依つて

當村の戸數は幾干あるか、人口は何位かなど、そんな事を百度聞いて見た所で、何の役にも立たん事を聞かれる。貴下は何方からお出で成なつたと問うて見ると、我輩は某縣某郡の者で、東京の何々大學の政治科を卒業したものだ、今度我輩が村長に成つて、一番理想の農村を建設しやうと思ふので、取調べかた、此の村の情況を見に来たなど、大分振込が大きいです。黙止つてへい、と叩頭をして居れば好かつたが、つひ愚老が憎まれ口を聞いたですよ」

「はい」

老人は少し間を置いて、

「愚老は別に慍つた譯ぢや無いが、相手は未だ年齢が若いので、下らん好奇心に驅られて飛んだ了簡違ひをしては氣の毒だと思ふ、言は、此方の親切から、つひ愚老は黙止つて居られなく成つて、まあそんな危い事は成さらん方が好からう！村長など、云ふものは見たよりも骨の折れるもんぢや、假令何學校を御卒業成されたお仁さまにせよ、單に文字上の學問と世間の實際學とは、其處に大分工合の異うた處がござる！何處の何と云ふ村で貴下を村長に推薦するか、それは知らぬが、悪い

事は云ひませせん、それはまゝ當分御辭退に成つた方が安全でもあり、且は御利益でもありましやうと云ふと、その青年先生、今日大流行のさも神経質らしい眼を光り輝かし、フン／＼と耳鳴のしさうな顔をして、イヤ怒るまい事か、怒るまいことか」

(一四) 青年の空想

「老人だと思つて萬事優しく出て居れば、これは如何にも怪しからん事を言ふ。我輩は東京に七八年間も遊學して居つたが、未だ嘗て一度も他より斯くの如き侮辱を加へられた事はない。然らばお前さんは、我輩が未だ年齢の上にて若いから一村の村長に成る資格が無い、イヤ村長などは勤まらぬと云ふのか。何うも太した勢で」

「はら」
「愚老は直に浴びせ懸けて言ひました。イヤ強ち左様云ふ譯でもないが、まゝ左様云つたやうな話ぢや。イヤ其奴は何うも怪しからん！人間が事業をするの

は年齢では遣らん、手腕で遣るのだ！憚りながら山の中で野生ちに育つて年齢ばかり食つたお前さんなどのやうな古い融通の利かん頭脳とは違つて、我輩の頭には二十世紀の世界的新空氣が充實ちて居る。何うも大分鼻息が暴いす」

「今日の若い人は何うも思ひ切つた事を申しますなッ……」
「全く以て罪がございませんよ」
老人は笑つて、前の談話を續ける。

「其處で愚老は斯う云ひました。イヤ頭腦の古い新しいは別問題として、水の手には魚が精しい。丁度それと同じやうに、他の事には無學であつても、農村の事情には矢張農村の者の方が精しい。お前さまは多寡が村長位など、お安く見なされるかは知らぬが、立派な洋服を着て、自分は役場で椅子にでも懸り、たゞ口頭ばかりの指圖で村が平和に治まつたり、また一村の幸福が増進するものだなど、思つてお居でなされると、それは大きに思はく違ひでございますよ。イヤそんな事は言はずとも知れ切つた事だ、其處を總て學術的に巧く結果を擧げて、今日の學問の效用を世の中に示すのが我々の責任だ！其處で愚老の曰くに、所が其の學術と實際

とが往々食ひ違ふから危いですよ。凡そ一村の人の頭にでも立たうと云ふものは、我れ先に立つて實踐躬行して着々功を擧げて示さなければ村の者は服しませぬよ。何とペラ〜おつしやつてもお前さまのは空想ぢや！宜しいかな加藤さん………」

「はい、如何にもなツ………」

「何故空想だと尋ねるから言ひました。本は何丈讀みなさつたか知らんが、第一お前さんには我々農民の武器とも云ふべき鋤の使用法一つ満足には分んなさるんでしやう！そんな農村の事情に暗い事で、農村の人心を巧く統一することが出来ると思ひなされるか。すると向ふさまの仰有る事が面白い、我輩は鋤や鎌では村は治めん智識で治める。所がそれが早大間違に間違うて居さッしやる！今日の農村を覺醒するにはたゞ口頭ばかりぢやいかん、自分で鋤を執つて真先に荒地を耕す考へで無ければ駄目ぢや！然るにお前さんのやうな、そんな藪枯の根を見たやうな細い白い指をして居る手で鋤の五分か十分も使つて見るが好い直に鋤を棄て、即功紙でも捜さなければ成らん。そんな意氣地の無え村長を上を据ゑて

置いては今日の農村は勃興せん………」

「實際です………」

客は膝を打つて叫んだ。

「ところが向ふは反省せんです。老人はそんな時代おくれの考へを懐いて居るから最早共に談ずるに足らんのだぢや！これから先の農業は人間の力ぢや行かん智慧で行くのだ。例へば昔から農村で喧しく言ふ肥料に就いて其の一例を擧げて見ても既に伊太利人で空氣の中から自由自在に窒素を取つて肥料を造ることを見ても既に伊太利人がある。その發明權を本邦人が貳百五拾萬圓も投じて買ひ取つて、現に九州の或る地方に目下取急いで其の設備を爲しつゝあると云ふ事すら山奥に居るお前さんなどはお氣の毒さながら未だ御存じの無い位だらう。また荒地を起すにしても左様だ、これは近頃獨逸人の發明にかゝるのだが、自由に取外の出來る従つて運搬にも至極便利な一臺の機械を据ゑつけて、これに少量の動力を與へれば、一町や二町位の面積を掘り起す事は朝飯前の仕事ぢや！これからは何うしても智慧ぢや智慧ぢや、今後村長が自分で鋤など把つて居るやうな薄鈍い事

で、その村の繁榮しさうな筈がないなど、聞いた風な事を言はせて置けば言ひ居るです」

(一五) 速納主義

「併し愚老は云うた。成程如何にも御説には感心しました！それは始めて承はつたが、流石は文明の世の中、いかにも結構なことでござる。成程空気の時から肥料が取れ、荒地がそんな簡単な機械で朝飯前に一町も二町も起せるやうに成つたならば、我々百姓共は寝て居つて樂に飯が食へるやうになるでござらう！たゞ少少心配なは、そんな重寶な機械が五圓か切めて拾圓位で買はれるものならば、愚老共のやうな貧乏村にも何うか斯うかして買はれぬ事もありません。若し五拾圓も其の上もするものぢやとなると、そんな物を買ひ入れる餘力が村にありません。また一面一町も二町も五町も十町も百町も千町も萬町もあるやうな平な荒蕪地が幾ヶ所もあるやうぢやと、何とか工夫をしてそんな機械も買ひましやうが

この邊の荒蕪地と申しまするのは、傾斜の急な而も至つて狭い所を此處に一畝、彼處に二畝と云ふやうに掘り起すのでありますから、そんな機械の必要は無いかも知れませぬ。またそれに一々そんな機械を用ひるのは第一億劫でもあり、且は又一面何町歩といふやうな平地を起すのとは事相違して、自然その機械を破壊すやうな事が無いにも限りませぬ。それよりも野蠻でも時代おくれでも根氣に任せ、砵々と鋤で打起す方が安全かも知れませぬ。それに此の村などは村民が皆一般に好く働きまするので、如何なる荒蕪地も最う殆ど耕し盡して、既に今日の處では其様な重寶な機械のお蔭を被りたくも被る餘地がありませんと言ひました」

「いかにもなッ……」

「すると大將まだ大いに嘲つて、お前さん達は萬事その通り舊思想に支配されて居るので今日の農村は何處でも悲境に陥つて動きが取れなく爲つて居るのだ！この通弊を根本的に大革進して、理想通りの新農村を建設するのは我々青年の任務ぢや天職ぢや！それこそ眞個に牛の糞ぢや無いが、益々出やうが太いですよ。其處で愚老は念の爲に聞いて見た。ぢやア承はりたいが、お前さまの理想の農村

といふは何んな村です？所が一向返事をせん。返事をせんので愚老の方から云うて見た。それぢやお前さんの理想の村と云ふのは、元來この世に働く爲に生れて來た村民一同をやすませて置いて、そんな色々な機械を買ひ入れて田畑を耕作させ、空中から自由に肥料を取つて、いづれ其の肥料も機械で作物に遣らせ、機械に手入を爲せて機械に取入れさせ、總てを機械仕かけにして、十分の利益を得させて村を繁昌させやうとでも云ふのでござるか。或は又更に進んで、今日植ゑた稻を明日十分に實せて取入れさせ、今日蒔いた麥を明日十分に實せて刈入れさせやうと云ふのでござるか。成程左様云ふ事に成つたならば、村はメキ／＼富むでござらう。更に進んで人造米人造麥と云ふやうな物を自由に御製造になるやうに成つたならば、農民共は何にもせずにお前さまの着てござるやうな立派な洋服でも着て髯を生し、胸にそんな時計の黄金鎖でも光らせて居つて濟むでござりましやうなと云ひたく成つたから終に言ひましたよ」

「はい、はい！」

客は老人の話に倦みず、謹慎して其の一言一句にも耳を傾けて居る。

「ハ、」

老人は笑つて、

「向ふが黙止つて居りますから、今度は此方の奥の手を少し話して聞かせて遣りませした。仰せの通り愚老は最う舊式の人間ですから新しい智識に富んだお前さま方とは違つて、一も機械二も機械と云ふやうな機械仕かけ縮めの世渡は危いですよ、愚老等のやうな古い頭腦の人間は、矢張何處までも危険を避けて、これまで通り真直に地路を行くに限る。この末は世の中の状態が何うなるかは知りませんが、今日の所ではまだ／＼古い仕來りの道を踏んで百姓は百姓らしく正直に眞面目に撓まず稼ぐのが安心でござる。お前さま方の遣方と違つて愚老等の方は何處までも舊式でござるから、今月植ゑつけた稻を來月取入れるとか、今蒔いた麥を翌月直に物にするとか云ふやうな便利な事は出来ません。それには矢張相當の時間と努力とをかけて、ゆつくりと結果を待たねば成りません。お前さま方の遣方は萬事速納主義だからそんな必要もありません。お前さま方の遣方では嚴重に左のお約束を守らなければ成りません。」

一 菜穀はこれを愛する事子の如くすべし。これを貴ぶ事親の如くすべし。
この二ヶ條を一日たりと忘るべからず。
一 農業には次第順序を立て、心懸くべし。第一に働き、次に工夫、次に肥料と心得べし。

一 田圃は一町作らんと思はば八段作り、能く手を入るれば一町分の收穫を得べし。農事をば奉公人にばかり任する時は、二人は一人に并ぶべし。以上のお約束をば堅く守らなければ、我々農民は到底家も榮えなければ村も榮える氣遣はありません」

「いかにも！成程！」

客は熱心に聴く。老人は愛想が盡きたと云ふやうな顔をして、

「すると何うです、これから理想の農村を建設するのが希望だといふ其の先生は話中途に失笑して、最う貴様のやうな耄碌老爺の話の聞く必要はないと云つたやうに、碌々告別もせずに行つて了ひましたよ」
「何うも今日の若い人は何れの地方でもなッ……」

「所が今日中年の人にも未だそんな人が多いやうです。只今お話をしたやうなのは例外だとしても、愚老の所に時々取調の爲だと云つて見える多數の人は皆略似寄つた浮いた考へを有つて居るやうに見えるのは、加藤さん、實に可歎しい次第でござる！」

老人は深く嘆息して、

「何うも貴下のやうな真面目な仁は實に少い。好くお尋ね下さつた！愚老の知つて居る事、並びに経験して居る事であるならば、加藤さん、何でも喜んでお話を致しませう！」

(一六) 長閑な聲

客は大いに喜んで、

「何分何うか」

言ふには言つたが、多年敬ひ慕つて居つた其の人から斯う云ふ意外な言を聞い

ては、根が當世流の横着な人でないので、餘りの嬉しさに言ひたいと思ふ事も言へず、早く問ひたひと思ふ事もオイそれと口に出ぬ。

「温順しい人ぢや、真面目な人ぢや、自分は斯う云ふ肌合の人が好きぢや、イヤ斯う云ふ着實な人でなければ到底村民を感化するなど、云ふやうな立派な動作は出来るものでない。これは好い人が訪ねて来てくれた、好い同志を得た有がたい、有がたい、日本全国の農村に慙う云ふ確乎した人がドシ〜と出て働いてくれなくては困る」

真面目を貴び眞摯を喜ぶ孫兵衛老人のことであるので、客の爲人の着實なのを嬉しく思つて我が子の偶々歸つて来たやうに歡待し、

「この村の事も精しくお話を致しまするが、貴下の村の御情況は今日何んな御様子でございますか、愚老の後學の爲に一通りお聞せ下さる譯には参りますまいか」
「はい、それは私からこそ是非一度お聞きを願つて、何分の御指導を仰ぎたいと存じて居る所でございます」

「ぢやア先アそれから先に承はることに致しませう。オイ〜三津や三津は

居らぬかな」

「はら」

聲諸共に美しい娘の顔が見はれる。

「お茶でもお客さまに進げぬか」

「はい、只今持つて参ります」

「ア、何うか最うお構ひ下さいますな」

「まあ何うか御ゆツくり、今夜は是非お宿り下さい、色々お話を承はりませう」

「有がたら存じまする！」

老人は微笑を含んで、

「好くまあ斯んな山の奥まで態々お訪ね下さいましたな！」

客は此の老人の温情に感じて、時刻が経てば程慕はしく懐かしく、何うしても今日初めて顔を見た人のやうには思はれぬ。

娘がお茶を持つて来た。續いて美しい香氣の高い草餅を持つて来て、

「只今他所から貰ひましてございます、何うかお一ツお客さまにお上げ申して下

さいまし」

「ア、好しく折好く好い物を貰うたのう」

老人は客に茶を薦めて、

「さあ貴下御迷惑かも知らんが、何うか一ツ食つて下さい」

「有がたうございませす」

老人は満足さうに茶を喫んで青い大きな草餅を頬張る。

午後も空は曇らずに、日は温として暖く、家の前にも後の方にも連りに長閑な鶯の聲が聞える。

「この節は滅切春めいて参りましたわい」

「左様でございませすな」

「お國の方の氣候と、此方は何うでございませすな？」

「左様でございませすな、花の蕾の工合と云ひ、木の芽の出方の加減と云ひ、略同じ位いかと存じませす」

「本年は少し氣候が早いやうでございませす。五日は確に違ひませすな」

「何うもそんな氣が致しませす」

老人は急に又おもひ出したやうに、

「それは、好くこそお尋ね下さいませす」

客は初めて我が村の情況を此處に語るべき機會を得た。

(一七) 村民の主業

「私の郷里は豊後國の片田舎でございませすが、去る明治二十二年町村制度の實施せられた時、舊七箇村の小部落を合同して、今日では宇多川村と成つて居りませす」

「はい」

「昔から村民の主業は農業でござりませして、外には少許の薪炭若くは木材を出す位のことでありませした」

「成程」

「私は明治三年の出生で、本年四十二歳に成りませすでござりませすが、私共の少年

の時代は四邊の村民が未だ至つて質朴でありまして、一般農業に全力を用ひて居りましたので、地味は好し、米麥その他の農作物も豊に取れる所から、何れの村も概して平和に有福に暮して居りましてござります。

「成程な！」

今度は老人の方が大なる趣味と熱心とを有つて聴く。

「私は今日の宇多川村字小出と申す戸數の四十戸ばかりある村落の舊名主を勤めて居つた者の三男に生れた者であります。當時私の家は色々不幸の續きました爲に、既に老衰の悲哀に接して居りました父の生計は、何方かと申すと非常に骨の折れる方でありました。」

「成程！」

「總領の兄は、其の頃最う妻帯致して居りました。當時老父の考へは何うかと申すと、幾千かの金を残して新夫婦に譲ることは出来ないうまでも、切て負債は残したくない。世に出る早々親の残した負債の爲に、他に對して悴に頭を下げさせるのは如何にも心外千萬だと申しまして、老父は當時色々心を痛め、私共の地方で

は其の頃私共の老父が始めて桑を植ゑつけ、養蠶なども始めて見たりなどして、まあ色々と家運挽回の方法を講じましたが、老父は未だ其の結果をば見るに至らずして、私が十四歳の秋に長くも病はずに六十四歳で病死致しました。」

「ア、それは〜！」

「まだ〜一家の運命に、春の音信が遠いと見えまして、その後又續々と不幸が續き、間を一年置いて母も病死致しましてござります。」

「それは何うも重ね〜！」

「當時總領の兄は二十六、その次に二十三歳になる兄が一人居りました。」

「はい。」

「これは今日もおもひ出ししても、誠に氣の毒な人でござりますが、十六七の頃から、太い痛風に罹りまして、兩足が利かなく成つた所から、毎日腹這つて居つて、草鞋や馬の靴を作つたり、又は竹箸などを削つて居りましたが、それが又兩親共に死ぬると間もなく餘病を併發致しまして、私が十七歳の春、左様丁度花がポツ〜咲きかける此頃の季節でありました。これが又長くも寝ずに死にしましてございませぬ。」

「それは何うも御不幸続きで……」

「その兄と私との間に、まだ二人居つたさうでございしますが、その二人は私の記憶にはまるで残つて居りません」

「それでは何方も未だ餘程小さい時にお亡り成さつたと見えますな」

「はい、一人は四歳、他の一人は六歳で亡つたやうに母から聞いて居りました。それでまあ兄弟と云つては總領の兄と末子の私ばかりに成つたのでござります」

「いかにもなッ！」

「私が十八歳の時には、兄には最う男女二人の小供が生れて居りましたが、その後度々の不幸続きに兄の生計は中々樂ではありませんでした」

「イヤ、大きになッ！」

(一八) 加藤氏の立身談

「私は十八歳の暮まで宅に居りまして、毎日農業を遣つて兄夫婦の手助をして居

りました。最早そろそろ徴兵の適齢にも達する所から兄に頼んで、教導團の試験を受けさせて貰うことに成りました」

「成程」

「私は少年の時から農業も嫌ひではありませんでした。が、讀書や數學なども太く好んで居りましたので、農事の閑な時を見ましては、村の學校の先生の所に通つてポツポツ教へて貰つて居りましたので、當時教導團に入れる丈の學力は何うか斯うか出來て居りました」

「成程」

「兄も幸ひ快く許してくれましたので、十九の春に愈々郷里を立つことに成りました。有がたい事には私は少年の時から村の人に太く愛せられて居りましたので、皆太く別れを惜んでくれまして、其處からも彼處からも餞別として幾分づゝの金を貰ひました」

「いかにも」

「所が前にもお話を致しました通り、兄はその頃太く困つて居りましたので、別に

兄の切ない懐は少しも痛めずに、左様でしたい。いかにも困つて居りましたので、諸方から貰つた金の内を割いて、兄に貳圓嫂の手に壹圓残して置いて、自分は眞個の旅費丈有つて、我が身の將來よりも、寧ろ兄夫婦の現在並に將來を氣遣ひながら郷里を出しました」

老人は點頭いて、

「成程貴下は左様でしたらう！」

流石は斯翁、好く人物を観、十分情を玩味つて、

「平素そんな優しい心懸を有つて居なさる貴下との生別、兄さん御夫婦は、その時嘸別れを惜みなされた事であらう！」

「はい、左様でした」

客は當時の悲みを明々地と想ひ浮べ、

「夫婦とも涙含んで、寒い日でしたが、二里ばかり送つて来て、別れて後も振返り振返り泣々歸つて行きました」

老人は眼を瞬き、

「それから何處へお出でなされた？」

「豊後の別府から汽船に乗りまして大坂に出ました」

「大坂に？」

「はい、それが斯うでござります。私の母は三里許隔たつた所から参つて居りましたが、母の弟に當る人の次男、私の爲には従兄に當る松次郎と云ふ者が、幼少の頃から大坂に奉公に出まして、幸ひ其の時は既う獨立して、大坂の難波邊で小商をして居りましたので、それを便つて参りまして、店の手傳をしながら一月ばかり世話に成り、大坂で教導團の試験を受けました」

「大坂でな」

「はう」

「その年直にお入團でしたかな？」

「左様でござります。併し自分の心には、その年入れやうとは思つて居りませんでしたが、何を言つても正則を踏んで勉強した身體でありませぬので、今年は多分困難からう。然すれば今年はこれから大坂で口を求めて奉公し、夜間寝る暇を割

いてなりと勉強し、翌年の試験には必ず及第しやうと思つて、國にも其の事を報じて置き、從兄にも自分の希望を話して試験の濟んだ後早速口を求めて貰ひ、松屋町と云ふ所の駄菓子製造元に入り、毎日車を曳いて市中や近在の小賣店に卸して廻つて居りましたが、その時の給料は向ふで食べて、月に一圓貳拾錢づゝでした。」「月にな」

「はい。他の奉公人は怠けました。私は一生懸命に稼いで、毎日十分に商賣をして歸りまして、主人に満足させました。すると翌月から月給が壹圓五拾錢になりました。」「

(一九) 軍隊生活

老人は點頭く。客は更に當時を語つた。

「前月貰つた壹圓貳拾錢の内、壹圓丈は全然餘し、貳拾錢の小遣で一月経ちました。翌月は更に參拾錢増しましたので、一ヶ月の小遣を貳拾五錢で立て、後の貳拾

五錢づゝを自分の手許に貯金して、月に壹圓づゝは國で其の日を過しかねて居る兄夫婦の許に必ず送る事に定め、二月目の月末に、前月餘し得た壹圓に今月分の壹圓を加へ、都合貳圓小爲替で、兄の許に送つた夜は、實に嬉しくて嬉しくて堪りませんでした。」「

「ア、感心な心がけぢやー！」
老人は嗟歎して、

「それから何う成さいましたな？ フーム！」

「その後四月五月と大坂に居りまして、五月の末に又貳圓兄の所に金を送つて遣りますと、おなじく大層喜んで參りました。その中には又月給が上るだらう。月給が上れば兄の許に今日よりも多く送金する事が出来るであらうと楽しんで、晝間は一生懸命に働き、夜間少許の暇を得て、翌年の受験準備をして居りますと、その年の六月の初めに陸軍教導團から從兄の許に試験に合格した通知書が參りました。」「

「ホウ」

「その時の嬉しさは未だに忘れませんが、自分は實に飛び立つやうな思ひをしてその通知書を主人に示し、斯々の次第であるから何うか暇を貰ひたいと云ふと、左様云ふ譯ならば是非ないが、家の爲には誠に惜いと云つて僅三四ヶ月しか居なかつたのに、貳圓餞別をくれました」

「その間に貴下が如何に好く稼いだかと云ふ事が分りますな」

「はい、月日は短うござりましたが、及ぶ丈主人の爲に盡した積りでござります」

「感心ぢや！」

「それからまゐ其の貳圓の金は國元に送り、自分は陸軍の方から旅費を戴いて大阪を立ちました、その頃は未だ汽車の便がござりませんでしたので、神戸に出て汽船に乗り、一晝夜かゝつて横濱に着きまして、東京を経て下總の鴻の臺に行き、陸軍教導團の騎兵科に入りました」

「騎兵？」

「左様にござります。これから先は國家の身體だと思ひまして、健康その他にも一層氣を付け、善く軍紀を守つて上官の命令に服従し、一心不亂に前途に對する準備

をして居りますと、操行も常に満點學課の方もそれに伴ひまして、意外の好成績で卒業し、その後滿一ケ年目には近衛師團の騎兵聯隊附の伍長に任命せられましたが、それは丁度明治二十二年のことでした」

客は當時の情態を想ひ出して、猶詳細に老人に語る。

「教導團の生徒拜命中は月に幾干も金が下りませんでした、それでも節約に節約を重ねて、隔月位に貳圓づゝ、兄に送つて居りました」

「出來ん事ぢや、感心ぢや！」

老人は切りに褒める。

「けれども近衛の騎兵聯隊附に成つて、此處に愈々本式の軍隊生活に入つて後は、一年の中元、若くは年末に際し、些少の金を送る外には、平素は一文も送りませんでした。然らば下士の俸給として月々軍隊より支給せられる所の物は自分で残らず、悉に費消したと思召して下さるな、これには少し考へがあつたのでござります」

(二一〇) 模範的農民

「それは何う云ふ考へで平素は一文も送金しなかつたと申しますと、月に貳圓か參圓づゝ送つた所で、兄の生活を目立つて樂にする譯には行かぬ。それよりも一時に幾何か纏めて送つて遣つたならば、永久に目立つて兄の生活の幾分づゝを補助する事が出来るであらうと云ふ考へから、兄に對しては遺憾ながら當分金は送られぬから、何うにか遣つて居つて貰ひたい、その中には私の身も何うにか成るであらうと云つて置いて、爾來足かけ五ヶ年間僅な俸給の内から貯金して、五ヶ年目には參百圓の金を残し得たのは、私に取つては實に大なる克己でありました」

「成程なッ！」

「勿論その間には長く同一の地位には居らず、職務を大切に勤めましたので、翌年の冬には軍曹に成り、四年目には曹長に成りました」

「何うも太した御出世でしたなッ！」

「俸給もそれに伴れて増すには増しましたが、普通の交際費丈は節する譯には参りません」

「大きに」

「唯私は酒を飲まず、烟草を用ひず、その外努めて無用の費を省きましたので、五ヶ年間に參百圓の金を残し得たのでありましたが、僅も積れば大きなものでございませす」

個中の消息に最も好く通曉して居る老人は微笑を含んで點頭いた。

「頃しも明治二十六年の夏でありましたが、私は三週間の休暇を得まして、曹長の軍服を着て、參百圓の現金を肌に着けて、村の人に假令少々づゝの土産でも持つて、滿六年振に始めて郷里に歸つた時の嬉しさは、實に何とも言へませんでした」

「左様でございませう！」

「久方振で兄に會ひ、家の様子を聞いて見ますと云ふと、有がたい、兄夫婦も息災でその間に非常に努力致した結果、今日の所では生活も以前に比べると、幾干か樂に成つて來かゝつた所だと云ふ。其處に私が三百圓耳を揃へて出して、立派な格安

の田地を三段買つて遣りますと、兄夫婦は跳り上つて喜び、イヤこれ丈の資本が出來れば、これから先は一層働き榮がすると云つて、夫婦とも顔の色を變へて喜びました。

「實に感心な話ぢや！」
客も太く満足の體で、

「それから又軍隊に歸りますと云ふと、今度は間もなく特務曹長に成りまして、今日第十二師團(當時は旅團)の騎兵聯隊附を命じられて小倉に参りました」

「小倉にはあ」

「すると其の翌年は例の日清戦役です」

「いかにも」

「最早愈々出征すると云ふ事になりましたので、私は真際に成つて狼狽せぬやうに一切の準備を整へて居りますと、出發は最早愈々一兩日の内だと云ふ事に成つて居りますと、其處に突然兄夫婦が態々尋ねて参り交したが、最早生きて歸るか歸らぬか知れぬと云ふので、夫婦とも非常に別れを惜みました」

「大きになッ！」

「私は夫婦を慰め且つ勵まし、私の身體は最う國家に差上げたものだ！萬に一ツも生きて歸らうなどは思はぬ！私はこれから戦地に行き、劍を把つて國家の爲に働くから、お前様方は早く郷里に歸つて鋤鎌を把つて、おなじく國家の爲に働いて貰ひたい！」

「其處ぢや」

老人は喜ぶ。客は勇んで、

「私が戦没した後には、私に屬する總ての物は、お前様方夫婦に屬するのは當然である。その時若し私の事を想ひ出して下さるならば、何うか益々健全なる模範的農民として、私と二人前國家の爲に働いて貰ひたい！」

「ア、立派な心がけの軍人様ぢや！」

老人は聲を放つて賛歎する。

(一一一) 農家の處女

「間もなく出征して平壤城の包圍攻撃を真先に、それから諸方に轉戦しました。その中には最う今度こそ生命は無いつた事は、一度や二度ではありませんが、或る時。偵察の任務を帯びて、深く敵地に進み入つた事も幾度かありましたが、或る時の如きは不思議にも自分一人が助かつて、實に重大なる任務を全うする事の出來た場合などもありました。併しそれは申すまでも無く全く私の所作では無くて、一に陛下の稜威の然らしめ給ふ所であつたのですが、それ等の事から私は戦地に於いて騎兵少尉に任命せられ、戦後論功行賞の際には金鵄勳章功五級に叙せられましてございます」

「イヤそれは何うも大變なお働きぢやつたのう！」

「凱旋後戦時紀念として、兄夫婦に更に三段の田地を買つて遣りましてございます」

「感心ぢやア、今日はこりやお蔭さまで嬉しい話を聞きますわい！フーン」

「その後矢張軍隊に勤績致して居りますと、その後六年目に今度は中尉に昇進し、猶勤績して居る中に、例の日露戦役に成りました」

「無論御出征成さつたでございませしやうな」

「左様にござります。その頃は六師團附に成つて居りましたが、真先に出征致しまして諸方面の戦闘に加はりました。今度も又屢々斥候などに出かけまして、有ゆる危険を大膽に冒しましたが、危険と其の人の生命とは又別物だと見えまして、數多の戦友は勇敢なる戦死を遂げたにも拘はらず、私は薄手一ツも負ひませすに無事に凱旋致したばかりで無く、今度も亦戦地に於いて昇進して大尉になり、戦後論功行賞の場合には、金鵄勳章功四級に叙せられましたのは、實に恐れ入つた次第でござります」

老人は更に改まつて敬意を表し、

「イヤこれは何うも飛んだ失禮を申し上げましてござります。何様世間普通のお仁でない」と云ふ事丈は初めから幾分存じて居らぬでもございませんでした

が、そんな立派な御經歷のあるお仁とは存じませずに、口に任せて出放題な事ばかり勝手に申しあげ、誠に失禮致しましてございます」

「イヤ恐れ入りますでございます」

「それから何う成さいましたな？是非伺ひたいものでございます」

「その後郷里の兄夫婦は心を合せて餘程家業を働んだものと見えまして、日露戦争の終つた頃に爲りますと、最早内福に暮して居りまして、この上お前の補助を受ける必要はない、此方は最う十分だから、お前も最う貰うべき者を早く貰つて後の計をして貰ひたいと、太く心配してくれますので、私も兄の心に従ひまして、去る四十年の春に妻帯致しましてございます」

「オ、それはまあお芽出たい！」

「當時は未だ軍隊生活を續けて居りましたが、妻帯するに當つて、私は他に少し希望を有つて居りましたので、荒い仕事に馴れない都會の娘は妻に貰ひませんでした」

「怪底な？」

老人は眉を擡める。騎兵大尉は語を續け、

「いよ、妻帯すると云ふ事になりますと、兄は態々私の任地に出て参りまして、田舎者では間に合うまい、此方に心當は無いかと申しました。けれども私は兄の心に反して能く労働に堪へる田舎の娘を、我が妻として望みました。その時私は兄に向つて、第一身體が丈夫で能く農家の妻としての任命に堪へ、心の素直な者でさへあれば、容貌などには重きを置かぬ、何處か農家の處女にお心當はありますまいかと云ふと、左様かと云つて兄は考へて居りましたが、イヤ左様云ふ望みならば一人好いのがある、これから歸つて早速話をして見やうと云つて、急いで郷里に向つて出發致しました」

(二二二) 歸農の動機

「その後間も無く兄から手紙が参りました。その文面に據りますと、向ふは喜んで承諾した。それは即ち隣村の某方の娘で、年齢は今年二十歳になり、容貌も美し

心意氣も善し、體質血統共に申分の無い上に、女子として一通の業にも達し、良家の處女には珍しい働きのもので、何んな荒い仕事も苦にせぬ、何うぢや貰う事にするかと申して参りました」

「フーン！」

「それでは直ちにその處女を貰はうと云ふ氣になりましたして、休暇を貰つて郷里に歸り、早速結婚は致しましたが、妻は任地に伴つては参らず、當分兄の許に預けて置いて私丈任地に歸り、その年は相變らず軍隊に勤めましてございます」

「成程？」

「さて軍隊の方は何うかと申しますと、實に濟々多士であつて、最早私のやうな無能な者が一將校の地位を長く占めて居ると云ふ事は、新進の青年士官に對して氣の毒でもあるし、第一陛下の軍隊の爲に毫も其の必要を認めませんでした」

「イヤ左様云ふ事はありませぬが……」

「其處で私は考へました。この上は早く軍隊を退いて、兼ての我が希望を果す道に向つて進まう。劍を執つても鋤鎌を執つても、我が國家と云ふ事さへ忘れねば、

我が陛下の御爲に即ち我が大日本帝國の爲に盡す赤心に變りは無い。ヨシこの上は速に復以前の農夫に歸つて一番大いに働かうと堅く決心致しました！」

「有がたい！有がたい！」

老人は兩眼を閉つて點頭く。

「それから直にお暇を頂いて郷里に歸り、一戸の古い農家と多少の田畑山林とを買ひ受けまして、妻と始めて世帯を有ち、これまでの軍服を木綿の筒袖に着更へ靴を草鞋に劍を鎌と取り變へて、此處四年間ばかり妻と心を一にし力を合せて、常に戰場に臨んだ心持で一心不亂に夫婦とも農事に全力を盡して居ります」

「ア、感心なお心がけぢや！愚老等には軍隊などの様子は好くも分りませぬが、最早大尉様にもお成りなされば、特に貴方様は金鷄勳章までもお有ちなされて居られるお仁、縦令軍隊をお退きになりましたも、年には大分の御餘裕がございませう。左様すればじつと遊んで居られても、氣樂にお生活が出来ませうに、さりと有がたい思召、これは圖らず近頃喜ばしいお話を承はりましたが、それには定めて何か深くお感じに成つた事があるのでございませうな」

「左様でござります。お尋ねの通りこれには深く感じた事がありませんので、私は早く軍職を退きまして、實は農村の人と成つたやうな次第でござります！」
斯く言ひ終つて大尉は暫く語を絶つたが、行儀正しく座つた膝に兩手を突いて更に又容を改め、

「國家の安寧秩序を保つ爲には、或る場合には戦争もしなければなりません。然るに其の戦争は單に軍隊の力ばかりで出来るかと云ふと、決して左様ではありません。假令軍隊の力ばかりが如何に強からうとも、背後に確乎した國民の後援が無かつたならば、軍隊ばかりで何うして強國を相手にして大戦争が出来まじやう。こりや何うしても我が國家をして、世界に於ける眞個の一大強國たらしめるには、先づ我が國家の財源を大いに培ふ事が肝要だと云ふ事を私は近き前後兩度の戦争に臨んで、事實の上に此の事を深く感じた次第でござります！」

「イヤ大きに！」
大尉が熱心に所感を語れば、老人は聲に力を籠めて答へる。

(一一三) 村民の墮落

「今日我が國家の財力を増殖するには、勿論商工業の力にも大いに依らなければ成りませんが、ただ今日この所では何と申しても我が國は農産國であります。して見れば全國各地の農村をして、各自自治の功績を挙げさせて、將來大いに發展すべき基礎を造らせる事が今日の急務であらうと思はれます！」

老人は何にも言はず只點頭く。

「然るに今日全國各地に於ける各農村の情況は何うだと申しますると、何れの地方何れの村も似たり寄つたりで、その地方々々で極めて少數の村落を除くの外は、餘り富んでは居らぬ様子でござります。ひとり富んで居らぬばかりならば未だ可いが、少數の村民を除くの外は、實に哀むべき生活状態の下に苦しみ惱んで居る村民を以て満されて居る貧しい村が相列んで居るやうに見受けます！」
「全く其の通りでござります！」

「戦後一度歸郷致しました時、さて我が地方の各農村の状況は何うであるかと云ふ事に心を止めて、人にも段々様子を糺き、また實地に就いて見ると云ふと、何れの村でも中産以下の農民の困難は實にお話になりません！」

その言此に及ぶや、大尉は覺えず面に憂の色を見はし、

「若しこれを今日現在の儘にして、その成行に任せて置きましたならば、其等の農村の運命は今後如何に成り行くでござりませうか、實に寒心の至に堪へん次第でござります！」

大尉は更に説き起す。

「中にも私が最も愕きましたのは、お耻かしながら我が村の現状でありました。前にもお話し申しました通り、私共の村井びに其の近郷の諸村は、私が國を立ちまする頃までは、何れの村の人も未だ至つて淳朴でありまして、故有の農民的美風を保ち、百姓は粗末な物を食べて粗末な着物を着、三百六十日一生懸命に稼ぐのだと心得て、一般農業に骨を折つて居りましたので、幸ひに地味は好し、米にしる麥にしる、その他の作物も豊に取れる所から、何の村も先づ概して有福に暮して居りました。

たが、僅此處二十年ばかりの間に、なるで形勢が一變して、今日の所では殆ど危機に迫つて居ります！」

大尉は眼前我が村の現状を想ひ浮べて心を傷め、

「何うも困つたものですが、さて何うして今日のやうな悲境に立到つたかと云ふと、その最も大なる原因は、現代社會の不健全なる悪風潮が漸々と片田舎の村々にまで入つて来て、丁度悪疫の微菌が甲から乙へと傳はつて人の生命を斷つやうに、その怖るべき害毒を流したので、村民は何時しかこれに感染し、祖先から繼承いだ無垢純朴たる農民的精神に遠かり、實を去つて虚を事とするやうに成つた結果は何うだと云ふと、以前は固く村民的美風を保つて、成るべく多く働いて、成るべく質素に生活したのと相反し、一定の收入以外には殆ど利益の得られぬ農民の分際で、生活その他に無用の費用を惜まず使ひ棄てると共に、肝腎の本業には骨を折らなく成つたので、その間の食ひ違ひが漸々に大きく成つて来て、終に一村の運命を今日の如き非運に陥らしめたのでござります！」

「つまり村方の人が、今日の世の中の悪風潮に感化れて、百姓の分際で、懷手をして

金山の一寸も発見やうと云ふやうな氣を起し、眞面目に働くことを厭ふやうに成つて、一方には飲食などに耽るやうに成つた結果、村が衰微して來たと仰有るのですな

「左様でござります。働かずに費うから勢窮する。その窮乏を補はんが爲に山林は濫伐する、田畑は安々と他村の人の手に賣り渡す、以て村は年々衰微して租税を納める方も無ければ、學校を維持する方法も就かず、人氣は益々悪く成つて盛なもの、喧嘩と賭博、詐欺、窃盜、その外色々怖ろしい犯罪者が村から出ますので、私共の村の者だと云へば、何處へ行つても戦慄せられ、村の名譽も信用もあつたものではござりませぬ。それ故に食詰者は土地には居辛い所から、壯者は炭坑の所在地などに行つて無頼漢の群に投じ、既に勞働の出來ぬ者などは、乞食に成つて村を立退く者もあるやうな次第、實に最うお話には成りませぬ！」

(二四) 村治の改善

「左様云ふ始末でありますので、村長などは私が今度村に歸りましてからも、既に三人ばかり人が變りましたが、誰の手にも合はぬものだと見えまして、滿一年と我慢爲切れずに皆辭職して了ひました」

「成程餘程難村ぢやと見えますな」

「難村にも何にもまるでお話にはなりません！」

「何うも困つたものでござるな！」

「有體に申しますれば、私が早く軍職をば退いて、村に歸つて農に歸したのは外でもありません。何うかして村民の頭上に警鐘を鳴して、彼等の惰眠を覺醒し、確乎たる一定の村是を定めて、自治の實績を擧げやうと云ふのが目的でありました」

「いかにも！」

「併し斯くまでに墮落し切つた一大難村を根本的に革進しやうと云ふには、單に机上の空論ではいかん、先づ此方が先に立つて、萬事共に實踐躬行して、明かに其實を示した上で、無い事には、村民が服せんであらうと思ひましたので、歸郷後自ら鐵鎌を把つて、實は村の者の驚く程これまで働いて居りました」

「イヤ貴方は實に感心なお方ぢや！」
老人は首を傾けて感動する。

「まあ及ばずながら自分は村の者の模範者となる心得で、人間は如何に此の世に處するものであるかと云ふ事を、我が日常の行状の上に於いて示しながら、實は密に機會の來るのを待つて居りますと、今度まあ村の有志者から強つて私に村長に成つて、何うか此の村を根本から革進して貰ひたいと云ふ事に成りました！」

「イヤ定めて左様でござらう！」
「無論私は此の事業の爲に我が後半生の全精力を最も然るべき方法の下に使ひ盡す決心で居ります！」

「イヤそれは何よりでござる！」
「自分に然う云ふ考へがありますので、軍職を退いて歸郷後は、今日大分世間に其の呼聲の高い、全國各地方の模範町村の沿革などに就きましても、書籍の上になんては一通當つて見ましてござります！」

「大きに！」

「併し模範町村と云へば、その名は如何にも立派でござりまするが、實際の上になんては即ち現在の所では、中産以下の村民の大いに困難致して居る所もありはすまいかと思はれます。例へば村の基本金を造るが爲に造林を遣る、これは誠に結構な事ではあります、斯やうな事は今年遣つて明年直に利益の上るもので無い、少くも二十年か三十年は待たなければ成らぬ。それには相當の手入もしなければ成らぬ、また多少の費用も懸るものだとすれば、後來大いに利益のある事だとしても、現在の所では造林をした爲に、中産以下の村民は却つて大いに困難して居るやうな所もありはすまいかと思はれます。併し一村の基礎を安全にしやうと云ふには、何れの村でも此等の事業を進んで遣らなければ成らぬのではあります、これを決行するに就けても、何か其處に好い方法はありませうか。此等の事は單に疑問の一つでありまして、これから村治の改善に着手するに就きましては、實に色々な疑問が起つて参ります！」

「はい！」

老人は微笑を含んで一言答へた。

「假令此方に十分遣らうと云ふ熱烈なる精神はありましても、下手な事をして其の爲却つて村民を苦境に陥れるやうな事がありましても、誠に申譯の無い次第でござります。それ故にまわこれは何うかして十分御経験のあるお方に就いて御意見をも承はり、また其の御實驗談をも伺つて見たならば、その間に多少自發する事もあるであらうと思ひまして、何れの村、何方の所に伺はうかと實は迷つて居りますと、不圖した事から貴下の事を承はり、今日始めて思ひを達してお目に懸り得た次第でござります。」

(二二五) 愛郷心

老人は満足して、
「イエ、最う貴下の御精神は好く分りましてござります。エ、前にもお話し申した通り、近年は大分遠方からも斯んな山の奥までお訪ね下さる仁がありますが、正直にお話致しますれば、それ等の人の考へは皆浮いて居ります。加藤さん！」

老人は臍の下に力を入れて眉を昂げ、

「所が疲弊し切つた一村を興さうなど、云ふ事は、自分の名譽の爲とか又は其の他の卑しい野心を當にして遣れるものではありませぬ！」

「イヤ、大きになッ！」

「所が愚老の會ふ人にはそんな人が多いです。實に困つたものでござる！然るに貴方は其等の人々とは趣を異になさつて、前後二回までも國家の爲に戰場にお立ちに成つて、深くお感に成つたのが第一の動機になり、また第二には何うかして國家の爲に我が村の村民を救ひたいと云ふ美しい至誠からの御發憤、その偉大なる御精神でお着手りになる以上は、誰に就いて何をお聞きに成るまでも無い、十分にお志をお貫きになるに極つては居りますが、左様な譯でござりまするならば、御参考などには成りませぬ、兎に角近年この村の財政、その他の状態が先づ幾分は順境に向つて來た道筋の大略を一通お話致すことに致たしませぬやう！イヤ、これが貴下の御参考に成らうがなるまいが、愚老は我れから進んでこれを貴下にお話致さぬ譯には参りませぬ。何故なれば、我が村を愛するの餘り、態々海をお渡

りに成つて、この四國の山の奥まで愚老如きものを特にお訪ね下さつた其の御精神は實に貴い！若し今日日本各地の農村に貴下を見たやうな御精神のお仁が續々現はれて、目下の困難なる境遇の壓迫に反抗する力盡き氣屈して、人間は何人も天よりこれを頂いて來て居る第二の智慧を使ひ、第二の力を用ひる勇氣の無いが爲に、徒らに疲勞し失望し落膽し自失して、今後更に第二の新運命を自ら造る計畫も努力もせず、世を果敢なく送つて居る農民の頭上に警鐘を打鳴し、彼等の總てに希望を與へ勇氣を與へ、齊しく奮起せしめたるならば、此處十年二十年後の日本の財力は實に大したものになるでござりませう！まゝ何うか確乎お遣り下さい、我が國家の爲でござりまする！

「有がたうござりまする、この上は及ばずながら我が一命を抛つて何處までも國家の爲に御奉公を致す決心で居ります！何うかまゝ貴老の御經歷、即ち御當村は如何にして、今日の如き御盛況の基礎をお開きに成りましたか、何うか其の邊の御消息を一通承はらせて頂きたう存じまする！」

「それではザットお話を致しませう。併し豫め御断り申しあげて置きますが、

愚老は御覽の通りの田舎老爺で、無論今日の時勢に適つた文字上の學問などはござりませぬ、唯物に觸れ事に伴つて我が一片の衷心から我が村を思ふの餘り、多年村民と心を合せて今日まで互に倦まず根氣よく、たゞ何事も村の爲、村の爲で遣つて來た丈の事であつて、これを學問上の理屈から推して何うしたなど、云ふやうな新しい話は少しもござりませぬ！また第二に豫めお断りを致して置きたいのは、この村は決して愚老の力で再興致したなど、云ふ譯ではありませぬ、これは全く村民一同の一致結合して互ひに相勵んだ結果に過ぎないのであります！併し何う云ふ事から村民一同そんな氣に成つたかと申しますと、それには色々混雜した事情があるのでござります。元來愚老は別にこれと云つて成し得た事績も無い上に、談話が下手でありますから、事の要點丈を摘んで明瞭にお話を致すと云ふやうな當世風の氣の利いた事は出來ませぬ。強ひて事の要點丈をお話すお分りに成らんやうな事にならんとも限りませぬ。また年齢を取りますと何かと忘れッぼく成りまして、飛び／＼ではから最う話の筋が立ちませぬ。それ故御

迷惑さまでにはございませしやうが、村治の改善など、云ふやうな六ヶしいお話は廢めにして、別にこれと云ふやうな事柄もございませませんが、兎に角愚老の今日までの身上話を大略お聞きに入れる事に致しませしやう。左様すれば其の中に村の話も自然出て参る譯になります。村の事に就いて兎や角と話す資格は愚老にはござりませんが、我が身の過去に就いて語ることは自由です、これは何うか左様云ふ事にして頂きたい。早い話が當村の村治の沿革など、云ふ六ヶしい事では無くて、つまり無學文盲な田舎老爺の「孫兵衛物語」とでも言ふやうな譯でございませしやう、ハッハッハ宜しうございませしやう、それでは早速お話し申しませしやうぞ！」

大尉は喜んで膝を進め、

「それでは何うかこれまでの貴翁様の御經歷を是非一通伺ひたいものでござりませしやう！」

(二一六) わが家の歴史

伊豫國の片田舎と云ふ中にもこれは極めて足場の悪い山の奥に恵比良と云ふ小な村がある。往時この村の庄屋殿の分家に孫次郎と云ふ正直な農夫があつた。孫次郎は親から身代を譲られた時は、一町ばかりの田畑と二ヶ所の山林の外に、未だ新しい水車を貰つた。

元來孫次郎は此の村の庄屋大住孫左衛門と云ふ人の次男であつた。彼は相當の能力もある上に、兩親に優しく事へ村の人にも極めて親切であつたので、兩親は年齢を加るに伴つて、總領の孫之丞よりは弟の孫次郎の方を頼みにして心を寄せ、村人も傲慢で殘忍な兄の方よりも、温和で同情深い弟の方に懐いて、彼の悪い孫之丞さんが早く死んで、孫次郎さんが此の村のお庄屋さまに成つて下されば好いなと内證では言つて居つた。

併し惡草の根は中々枯れぬもので、孫之丞は死なかつた。死ぬ所の話でない極めて健に成人して、最早嫁を貰ふ年配に成つた。それは好いが孫之丞の悪性は年齢を取ると共に増長して、親の言ふ事でも已れの氣に適らぬ事は決して容かぬ。兩親共に身の行末を案じて、「何うか嫁丈でも氣心の優しいのを貰ひたいものだ」

と望んで居た。

嫁が来た。暫く一所に住んで暮して見ると、兩親は我が長子の夫婦に對して、全然失望しなければ成らなかつた。言ひ換へて見れば、餘程吟味して貰つた積りであつたが、似た者夫婦とは好く云つたもの、嫁は顔こそ美しけれ、心情は誠に邪慳な女性であつた。

「これぢや到底も長くは一所に居られぬ！」

兩親は斷念して、弟を分家させて、これに夫婦が老後の身を託する事にして、財産の約三分一位を弟の方に分けて遣ると云ふと、強慾な兄の孫之丞は、「弟の方に遣り方が多い、最少し此方へ渡せ」と父に迫つた。

併し孫左衛門もこの時は大いに踏張つて、

「黙れッ、總領は總領で立て、十分に遣つてある、いやだとあれば勝手に出て行け、親に對して怪しからん奴ぢや！」

日頃は温厚な人であるが、この時は太く叱りつけたので、「おのれ今に見ろ」と心の中には太く含んだが、流石に強慾な孫之丞も、口に出しては不服を唱へ切らずに

引込んだ。

その時兄の孫之丞は二十五歳、弟の孫次郎の方は、未だ二十一歳にしか成らなかつた。

家督分配をすると共に、父孫左衛門は本家と近く軒を列べて、弟の家を新築し、兄に庄屋の役目を譲つて、自分は氣安い隠居の身に成り、老夫婦は弟の孫次郎を連れて分家の方に家別した。

孫次郎は兄夫婦と違つて、洵に優しく兩親に事へ、一生懸命に稼ぐので、兩親は喜んで、次男を助け、水車の方にも人手が要るので、一人の作男を使つて、二年ばかり氣安く生活して居つた。

その中に孫次郎も、最早嫁を貰ふべき年齢に達した。併し兩親は總領の嫁に太く手を焼いたので、今度は迂濶には貰はなかつた。

「一年二年おくれても差支ない、今度は何うか氣心の優しい嫁を貰ひたいものぢや！」

兩親は常に内々斯う云つて、孫次郎にも其の譯を話すと、

「イエ決して急ぎは致しませぬ、母屋の嫂さんを見たやうな氣の強い者を貰つてはお父さんやおッ母さんに此の上また何んな悲歎を懸けぬとも限りませぬ。そんな事に成るやうならば、私は生涯獨身で居た方が好い」
兩親は其の優しい心懸を喜んで、益々孫次郎を可愛く思ひ、何時も分家の方に居て、母屋の方には餘り覗いても見なかつた。

(二七) 雪と墨

その後また二年ばかり親子三人で氣樂に暮した。その中にも絶えず嫁は捜して居つたが、まだ何うも思はしいのが見當らなかつた。

すると此處に良縁あつて、急に縁談が纏まつて、三里ばかり隔つた佐野と云ふ村の、これも同じく其の村の庄屋の分家の娘を貰ふことに成つた。

萬事滞りなく進行して、いよいよ此方に貰ひ受けて見ると、芳紀は十八名はお壽美。嫂程の容姿は無いが、愛嬌には此方が富み、兩親の望み通りに氣が優しくして仕

事も出来、その上中々の働きもの。

「イヤ當つた〜豊年〜！」

老爺どのもホク〜と喜ばるれば、姑も太く氣に通り、

「まあ好い嫁を貰ひました！」

兩親は望みが足りた、安心した、朝夕唱へる念佛も、腹の底から出て來出した。

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、ア、有がたうござりまする！」

眞に二世安樂の感謝の聲。

夫婦交情も仕合せと頗る睦い。

「お壽美！」

「孫次郎さん！」

二人とも楽しんで稼ぎ、その上何方も洵に優しく兩親を撫恤るので、老夫婦は何方も五體の溶ける程喜んで、

「お蔭さまで安らかに餘命が送れる！」

「眞個に安心致しました！」

新夫婦が至誠を盡して老夫婦を撫恤れば、老夫婦も新夫婦を撫恤つて、一家は誰も満面常に春風に吹かれる心地。一家の内は斯う成つて來ると、仕事もズン／＼と埒もわけば朝夕の御飯も旨い。病氣その他の災害も斯う云ふ家は避けて通るのて家が段々繁昌して來る。

分家の運命は今丁度この好機運に向つて來た。

本家の夫婦は二人とも其の性強慾邪慳な上に、揃ひも揃つて嫉妬深い質。分家の景氣の好いを見て喜びはせず、却つて嫉み、何かな事あれかしと祈つて居つた。

おなじ兄弟でも兄の孫之丞と弟の孫次郎は雪と墨程異つて居つた。兄の方は懐手をして居つて、人を泣かせて自己の腹を肥さうと云ふ善く無い質。これと異つて弟の方は正直に人の二倍も三倍も働いて身代を殖すと云ふ地道な遣口。それに兄の方は世間に對して義理も人情もあつたものでない、自己の利益を計る爲には他に對して何んな酷い事でもするが、弟の方は世間に對して義理も缺かぬば人情にも背かない。義理人情を缺かぬばかりか、兄と異つて、乃公は此の村の庄屋の

分家だ！と云ふやうな顔もせず、何人に對しても物和かに交際つて道を譲り畔を譲り貧者老人を憫んで、困る者には我れから進んで與へるので、兄は蛇蝎のやうに人に嫌はれ、弟は冬の日の光のやうに何人にも懐かれて居つた。

分家の評判が好ければ、好い程本家の方ではこれを妬んで、「おのれ何うかして痛い目に遭せてくれやう」と睨んで居た。けれども如何に己れが兄だからと云つて、善人に向つては何と手の出しやうも無い。その上に年は老つても兩親が朝夕傍に附いて居るので、孫之丞夫婦は弟夫婦を苦しめたくも苦しめる譯には行かなかつた。稱賛すべき廉こそ多けれ、何の罪も咎も無い弟夫婦が、孫之丞夫婦に取つては何でそんなに悪かつたものか、イヤこれは全く分家の方の評判が好いのを妬んで「おのれ何うにかしてくれたい」と云ふ癖んだ了簡から、人の子としてあるべきことか、總領夫婦は兩親の死ぬるのを待つて居つた。孫之丞は常に心の中に言つて居つた。

「おのれ今に父親が死んだら……」
所が中々兩親共に死なかつた。總領夫婦は萬事に就けて、我が兩親の死を祈つ

たが、老人夫婦は至極達者で、分家に餘命を送つて居つた。

(二八) 分家の發展

そんな譯だから孫之丞夫婦は、弟と異つて我等夫婦こそ大切に兩親の老後を見
るべき筈であるにも拘はらず、まるで分家を覗いても見なかつた。

隠居は時々歎して居つた。

「何うして彼んな人間が生れたぢやらう？世間に對して恥かしい！盆が來うが、
正月にならうが僅十歩も歩けば事が足りるのに、夫婦とも親の所に一度顔出もせ
ぬ、彼んな事で何で満足に庄屋の役が勤まらう、村の者に氣の毒ぢや、評判の好くな
いのは、當然ぢや！」

けれども隠居夫婦が此の不滿は、一方から弟夫婦が十分に償つて、而も猶澤山の
餘裕があつた。兄夫婦が兩親に對して素氣なければ素氣ない程、弟夫婦は兩親を
大切に氣安く老後を送らせた。

兩親は、弟夫婦の年一年毎に益々以て温い孝養に對して、何方も太く満足し、
「ナニ母屋の方で何うしやうと構はない、此方は分家の方に居れば生きながら極
樂ぢや！」

兩親は常に斯う云つて慰め合つて、

「孫次郎や！」

「お壽美や！」

次男夫婦を心から頼みにして、その睦じさは餘所の見る目も羨ましいやうだ。
世間の人に向つても、隠居夫婦が口を揃へて、

「夫婦とも何方も洵に孝行者でござります！世に此の上の満足ありません！」

世間でも皆左様云つて、誰一人孫次郎夫婦を褒めぬ者も無い。

所がお隣家では耳が痛い。

「眞個に忌々しい奴等ぢや！」

「分家のお壽美は私と異うて、中々食へん女でございます。老人夫婦を好いやう
に抱き込んで、彼の三段ばかり別にしてある森下の田地や、山畑の楮を己等の物に

しやうと云ふのでござんしやうし

「何に見て居さつせえ、乃公が今に何うするか」

何れの土地、何時の世の中でも、正直に根氣よく働いて、それで身代の太らぬと云ふ事は無い。分家以來早物の十年も経つ中には、分家の身代はメキ／＼太つて、田畑も五六段殖ゑ、楮の株も大分出來た。

この村の本業は農副産物としては木材に製紙である。孫次郎は一生懸命に成つて農業を遣る紙を漉く、水車からも上る、それで自分は酒は飲まざ、何にもこれと云ふ道樂が無いので、年々目に見えて身代が太つて來た。

「感心々々、お前等は今に屹度樂が出来るぞ！」

隠居夫婦は喜んで褒める。孫次郎夫婦は親の慈悲を身に染みて有難がり、一方に於いて益、父母に孝養を盡すと共に、他の一方に於いて家業大事と働いて、而も熱心なる佛教の信者として世に立つた。

兄の方の行狀は、弟とはまるで反對の方向に片走して、自分は毎日のやうに遊んで暮し、小作人を苛めたり、他に色々不正な事をしてたりして、おのれの腹を肥して居

た。

けれども不義は天が許さない。そんな無理非道な事をして、他の物を唯取るやうな事を計畫んでも、正直に汗水を垂して稼ぐ、弟夫婦の身代の延方には及ばなかつた。

隠居孫左衛門は其の後十五年間、次男の厚い孝養を受けて、何不自由も無く氣樂に餘命を送つて居つたが、天壽が盡きたか、或る年の霜月半に病床に就いた。

(二九) 父の遺言

孫次郎は早速これを母屋に知らせる。一方には直に醫者を呼んで診て貰つた。ところが醫者は首を拈つて、何うも判然とした事を云はぬ。

兄夫婦が落着いて居るに反して、弟夫婦は心を痛め、直に又遠方から土地で名高い名醫を迎へ、色々手當を加へて見ても、病人は唯弱る一方である。

「何うかして最う一度本服させる道はあるまいか」

孫次郎は更に今治から醫者を呼んで三人に立合つて貰ひ費用を惜まらず看護に力を盡して見たが病人は日に増しに弱つて、發病以來十日目に息を引き取つた。

孫左衛門の往生は實に立派なものであつた。病人は豫め死期の迫つたのを知つたものか、今日が最う此の世の最終と云ふ日の正午過に、

「何うか少し起してくれろ」

未だ聲も確に判然と言つて、病床に付き添つて居る孫次郎夫婦の顔を視た。夫婦でそつと抱へ起して、孫次郎は背後に座つて父を抱いた。病人は面を上げて、

「お壽美や、私に口を嗽がせてくれぬか」

「はい」

直に茶碗に清麗な水を汲んで、片手に金盥を持つて来て、

「父さん、さあお口をお嗽ぎなされや」

口に近く茶碗を出せば、病人は二三度嗽いで金盥に吐き、

「序に手を洗つて貰ひたい」

お壽美は直に金盥にお湯を取つて来て、手拭を浸し、堅く絞つて顔を拭いて遣り、

更にお湯を取りかへて、手を清潔に洗つて拭いて遣つた。病人は喜んで、

「ア、これでさつぱりした！私も最う今日が此の世のお別れぢや！神佛にお告別をしなければ成らぬ」

兩手を合せて神を拜み、佛を拜み、次には傍に来て居る親類縁者の人々に最後の告別を済し、本家分家の孫達の顔をも一一見渡した後、今やつと遣つて来た總領の孫之丞に向ひ、

「孫之丞、私も最う今日が愈々この世のお別れぢや！別に言ひ置く事も無いが、お前達夫婦はこの後、最う少し心を和に持たんと云ふと行末が善くあるまいぞ！人間はな、誰も一度は今日の私の場合に臨まねば成らんのだぢや！人間は常平生の心がけが正しくないと云ふと、私の今日の場合に成つて狼狽へねばならぬ！餘り人間の道に背いた事をするに云ふと、お前達一生は無事に済んでも、子孫の代になると云ふと必ず善くない報が来るぢやのう！悪い事は云はん、何うか最少し夫婦とも、今後は心を和に持つてくれ！」

夫婦は何を言ふかと云ふやうな顔をして、ウンともスンとも答へなかつた。

病人は何と諦めたか暫く念佛を申して後、次は弟の孫次郎夫婦に向ひ俄に柔和な顔を見せて、さも満足さうに口を開いた。

「お前達は夫婦とも好くまわ長い間私に孝行をしてくれた！満足ぢや、過分ぢや、私は實に嬉しいぞ！何うかまわ夫婦とも此の上ながら身體を大切にして稼いでくれ！お前達夫婦に就いては私は安心して眼を瞑る！何か最少し禮に形見を遣りたいが今日の私には最う何にも無い。たゞ私等の隠居扶持として田地が三段、それに楮が少しばかり取つてある。この上老婆さんもお前達に世話になるから彼はお前達夫婦に私が形見に遣る。本家の方には總領は總領として最う十分に家督を譲つてあるからそれには及ばん、彼はお前達に私が形見に遣るぞ！それは此處に居る親類一同の人に好く聞いて置いて貰ひたい！皆さん宜しうござるか
な」

「はい、その事は一同承知致しました！」

親類一同確と答へる。

孫之丞夫婦は親の臨終を餘所にして、何時の間にか黙止つて歸つた。

「まわ何と云ふ人達ぢやらう！」

一同は皆驚いて齊しく顔を見合せた。

「何うか寝かしてくれ！」

病人は又本のやうに靜に寝た。

(三〇) 兄の暴狀

麗な春の日の漸々に暮れるやうに、その後病人は段々末期に近附いて、その日の夕方誠に立派な往生を遂げた。

最う今が臨終と云ふ時に、急いで本家に知らせたが、孫之丞夫婦は顔も出さなかつた。

孫左衛門の凶報は、忽地村一杯に傳はつた。

「庄屋の御隠居様が亡らつしやつたさうぢや！」
我れもくと皆吊禮に飛んで來る。前の五作がお寺に飛ぶ。孫次郎の家は俄

に人の出入が烈しく成つて、今夜はお通夜と云ふ事に成つた。

孝子孫次郎は兩眼を泣き膨し、餘所の見る眼も氣の毒であつた。

例令床には就いて居つても、今日まで口を利いて居た人が、光の點れる頃には早佛様に成つて、前には黒い烟が靡き、一本花を供げられて、既にお經の聲が聞える。

孫次郎は夢のやうだ。

「この上の孝養には、切ては葬式丈でも立派に勤めたい。人間は斯う云ふ時があればこそ不斷は節約をして働いて置いたのぢや！」

御飯も煮深も十分に用意して、酒の好きな人には酒を飲せ、これも佛に供養の一ツと思つて、通夜に來た村人に快く饗應つた。

その爲夜伽も賑で、死者も嘸や満足ぢやらうと思はれた。

村人の念佛やお經の聲の裡に夜が明けた。いよいよ東が白んで、その中に朝日が昇つた。昨夜は落葉に時雨の音を聞いたので、孫次郎は若や此儘明日は雨に成りはすまいかと、竊に心を痛めて居つたが、今日は實に立派なお天氣で、冬の日としては此の上も無い美しい空合に成つた。

「費用はいくら懸つても構はぬ、これが最う此の世の別れぢやから、今夜最う一夜死者を止めて、十分準備をして、明日賑に葬式を営まう」

孫次郎は其の手筈にして、一方には葬式の準備をしながら、その夜亦賑に通夜をした。

さて今日が愈々葬式の當日と云ふ日の朝になると、突然兄の孫之丞が遣つて來て、

「これから死者を家に連れ行つて、葬式は乃公の所から出す」

孫次郎は驚いて

「それでも家で此の通り、悉皆準備をしましたから」

怖ろしい血相をして睨みつけ、

「言ふな、總領の家から親の死骸を出して葬式をするのに何が不思議ぢや？」

言はれて見れば一理ある。成程理屈はあるにはあるが、「それならば生きて居る中に何故總領のするべき事を仕なかつた？」と突ッ込めば突き込む隙は十分ある。けれども親の死骸の前で彼此争ふのは穩でないと思つて、孫次郎は温順し

く譲り、

「それでは左様しておくんないら」

「當然ぢや！」

直に早桶を自分で引ッ擔いで行かうとする。

孫次郎は温順しく譲ッたが、母親が承知せぬ。それと見るより立塞がり、

「コレ孫之丞其許は死者を何うさつしやる？」

「家に伴れて歸ります！」

「出来ませんい、や、そんな勝手な理屈は通らん、何と云うても私が許さん！」

「許さうが許すまいが親の葬式は弟にや頼みません」

「イヤお前のやうな人間には私が頼まん！」

「頼まれんでも親の葬式は本家の門から出すのが當然でござる！餘り彼此言ひなざると私には私の了簡がありますぞ！」

恐喝しつけて早桶を引ッ擔げ、その儘早々と歸つて了つた。

(三二) 至孝の人

葬式は其の日の夕方本家の門から出た。いかにも見事な葬式であつたが、總ての費用は皆弟の手許から出たのであつた。その夜の供養も同じく本家でしたが、費用は矢張孫次郎が負擔した。

七日々々の法事は一切弟の家で勤めた。四十九日の營にも本家からは米一升も出さなかつた。それ丈ならば未だ好いが、孫左衛門が死ぬる時に大勢の人の聞いて居る前で遺言して、孫次郎に形見に遣つた三段の田地と、外に楮の植ゑてある山畑を、此方に渡せと云ふ談判を持込んで來た。

「イヤ、彼は知つての通り私が形見に貰うたのぢや」

「それぢや水車を此方に寄來せ！」

「イヤ、彼は分家した時に、私の方に附けて貰うたのぢや」

「ナニ左様で無い、彼は未だ何方附かずであつたのを、汝が勝手に使つて居たのぢ

や。水車を渡すのがいやならば田地を寄來せ、二ツとも一人で取ると云ふ方があ
るか」

「イヤそれは大層話が異ふ！彼の水車は上げる譯には行かぬ！」

「ぢやア田を寄來せ！」

「兄さん、それは無理ぢや無いか、お前さんもちやんと知つて居なさる癖に……」

「ぢやア水車は汝にくれて遣る！その代りに田は己の方に取る！汝は弟の癖に、
元來分配前を多く取り過ぎて居る！彼の田は己が取る！」

母親は聞いて疊を叩き、

「おのれ何で其様な無法な事を云ふ？彼の田地は孫次郎が父さまに形見に貰う
た事は親類の人達も皆聞いて知つて居る。それにはちやんと證人もある、餘り不
法な事を言ふと私がお上に願ひ出るぞ！」

「出るならば出なさい、何と云うても彼の田地は己のものぢや！渡さなければ泥
棒ぢや！泥棒には泥棒の成敗をせねば成らぬ！そんな奴は此の村には置けぬ！
置いては庄屋の役目が立たん！」

實に無法な事を言ふ。

母親は堪りかね、親類の主立つた人を呼んで相談した。

「そりや孫之丞さんが無理ぢや！」

誰も口を揃へて云つて談判して見ても受附けん。毎日夫婦で弟の家に暴れ込
んで、

「泥棒、畜生、叩き殺すぞッ！」

まるで夫婦とも狂人としか思はれぬ。

初めは餘り無法ぢやと思つたが、孫次郎は美しく胸を投げ、

「ヨシ、ぢやア田はお前さんに上げるから勝手にしなさい」

母親は憤り、「そんな事は成らぬ」と云ふ。孫次郎は慰めた。

「おッ母さん最う何にも云ひなさるな、世間に對して見ツとも無い！向ふは正直
に働いて田地を殖すことが出來るので、彼んな無理な事を云うて他の物を横取り
するのぢや！私は又稼いで買うから差支は無！併し困つたものぢやのう、彼で
私は此の村の庄屋でござるでは村の人が氣の毒ぢや！」

母親は此の事に太く心を動かした爲か、それから間もなく床に着いた。孫次郎は仕事も手に附かぬ程心配して、

「母さん何うぢやな、ウントお薬を服んで、精出して美味物を食べて、早く快く成つておくんないよ。父さまに死なれた上に、又お前さまに死なれては何を便に私は稼がう！早く快く成つておくんないよ」

「アイ有がたい！ア、世の中は思ふやうに行かぬものぢや！人に勝れてお前等夫婦の孝心深いのに引きかへて、隣家の彼奴等夫婦は何うぢや、彼で人間と言はれるか、私は世間の人の手前が耻かしい！」

「まあ、そのやうに苦になさるな、何も因縁事と諦めるより外仕方が無い。その代りには私等夫婦が及ばずながら本家の人達の分もお前さまに孝行するから、何うか心を廣く持つて、未だ、五年も十年も成らば私等が此の世の中に生きて居る限り、何うかお前さまも生きて居て下だされ！私は最う外に望みは何にも無い！」

言ひく、ホロ、涙を流す。

(三二二) 再度の暴行

朝に夕に慰め撫恤り、醫者や薬は申すまでも無く、食物その他の手當にも心を盡し手を盡しての孫次郎夫婦が孝養看護も其の効薄く、老母は漸々身體が弱つて、翌年の春の彼岸の中日に、これも亦立派な往生を遂げて世を終つた。

孫次郎夫婦の者は、村で誰一人感ぜぬ者の無い程、老母を大切に看護したが、その間に本家の方からは夫婦とも一度顔出しもしなかつた。

老母は臨終の當日、改めて孫次郎夫婦に向つて禮を言ひ、親戚その他大勢の人の聞く前で、

「私の死骸は何と云つても本家の門からは出して貰ひたくない、何うか是非とも此の家から葬式を出して貰ひたい！私の遺言は是れ一ツぢや！外には何にも言ひ置く事は無い」

言つて静に息を引き取つた。親類その他の人々も皆言つた。

「親の病中スグ隣家に居りながら、幾度知らせて遣つても、顔出一度せぬやうな不人情な人間には、死んだからと云うて別に知らせんでも好からう！生きてる中でさへ来ない位なら死んだ後では猶の事来はすまい、黙止つて此方で葬式をするが好い、改めて又知らせると遣つて来て、何んな事を言ひ出すかも知れん」
併し孫次郎は其の議には従はなんだ。

「それも左様ではございますが、親の死んだのも知らせんとあつては、後で又何んな難題を持込んで来ぬとも限りませぬ。これは改めて知せた方が穩でございませう、また知せるのが弟の道でございませぬ」

向ふは何う出やうと關はない、此方は正しい道を踏んで、早速今母親が息を引き取つた事を知らせて遣つても、「今日は役向の事を出かけて居らぬ」と云つて遣つて来ぬ。

「情ない人間ぢや！」

孫次郎は心に歎いて、今度も亦二夜死者を止めて、おもふ丈鄭重に萬事を營み、今日が愈々葬式の當日と云ふ朝になると、突然又孫之丞が遣つて来て、死骸を擔いで

行かうとする。

死者の遺言があるので皆拒んだ。孫次郎は手を摺り足を摺つて、

「兄さん今度は何うか私の家で營ませておくんなさい！」

「馬鹿云ふな、歴とした總領が控へて居りながら、大切な親の葬式を弟の家でさせては乃公の顔にかゝる！黙止つて見て居れば何時でも仕たい放題な事を勝手に仕やがる！」

「イヤ左様云ふ譯ではないがな……」

「黙止れ、控へろッ！兄に向つて、殊に乃公は此の村の何だと思ふ、怪しからん奴ぢや、赦さんぞッ！」

今度も亦其儘死者を擔いで歸つた。

擔いで来たが費用は懸らぬ。葬式の準備を一切弟の家から移して来た。

今度も立派は葬式であつた。夜の供養は此方で勤めた。よしや形ばかりにも

せよ、前とは異つて、今度は一切本家でして、孫次郎には少しも手出を爲せなかつた。「何うしたのぢやらう、彼の吝い人が假令形はかりの事にもせよ、一切自分一人で

遣つて、此方に一文も出せと云はぬのは不思議ぢや、親に對して少しは心に耻ぢたのか知らん？」

疑つて居ると左様で無かつた。四十九日の法會の濟んだ後で使を寄來して一寸來てくれと云ふ。

「何だらう？」

怪しみながら行つて見ると外でない。

「乃公も今度は大分かゝつた、お前が幾干か出すか何うぢや？」

金のかゝつた事を云へば、葬式の準備をした此方の方が遙餘計にかゝつて居る。けれども孫次郎はそんな事は口にも出さぬ。

宜しうございます、費用は全體何丈かゝりました？それが分れば、一切私が出しましやう！」

「イヤ全額出さんでも好い半分出せ！お前の方で拾兩持つて貰はうか？」

「拾兩！」

孫次郎は目を圓くした。併し親の供養をしたのに對して、金の事は言ひたく無

50

「宜しうございます、出しましやう！」

「それから最一ツ相談がある」

「何うせ碌な事ではあるまい」

孫次郎は豫期して居つた。

(三三三) 豺 狼

豫期しては居つたが、言ひ出されて驚いた。

「老母さんの生きて居る間は面倒になるから、私は強ひても言はなかつたが、實は彼の水車は父親の生きて居る間に私にくれる事に約束してあつたのぢや！約束して置きながら父親が何時までも勝手に使つて、知らん顔をして居るので、已も面白くないので、餘り傍に寄附かなかつたのぢや」

孫次郎は呆れて物が言へなかつた。

一方は何處までも太々しい。

「何うぢや物は相談ぢやが己に綺麗に寄來さんか乃公は斯んな一刻者ぢやから一度斯うと云ひ出してからは後には引かんど！その代りに乃公の言分を立ててくるれば何で乃公がお前を敵にしやう。考へても見ろ二人しか無い兄弟ぢや無いか。併し豫め言うて置くが此處はお前の返事一つで一生敵にも成れば又味方にもなる。此處で彼の破水車を乃公に綺麗に返すが得かこの村の庄屋を生涯自分の敵にするが損か此處はまわ篤と考へて見るが好い。なあひとり今日ばかりで無い昔から互に意地の張合から立派な人で互に兄弟合戦をした人は幾人もあつたで無いか。兄貴丈に云うて聞せて置くが後で後悔せんやうにするが好いぞ！」

「こりや兄貴と庄屋と云ふを笠に被て己の物を又た横領しやうと云ふのぢやなッ！」

正直者の孫次郎は思案に餘つて悲しく爲つた。

「何で泣く？何が悲しい？」

「イヤ何が悲しいと云ふ事も無い。親の死んだのが己は悲しい！切て片親丈でも生きて居てくれたら己も斯うは苛められんぢやらう！」

「誰が苛める當然の事を言うて居るのぢや！いやならいやで可い乃公は一番上に願うて埒を開ける」

「ぢやア何うしても彼の水車を奪ると云ふのかい？」

「奪るのぢや無い戻させるのぢや！」

「彼は何うしても遣られん！父親の固い遺言で彼は死んでも他には遣られん深い理由がある！外の物と交換へて貰ひたい！」

「ヨシ！それぢや此の前田を乃公に寄來せ！僅一段半しか無えが兄弟の事ぢや

から負けとからかい」

「イヤ彼も遣られん！彼は親譲の大切な田地だから渡す譯にはいかん！」

「ぢやア水車の代物にやア何を寄來す？」

「水口の彼の田を遣らう彼ならば己の力で買つたのぢやから未だしもぢや！」

「馬鹿云へ彼は一段か無えぢや無えか。それぢや彼の宮裏に去年汝が買つた彼

の田地を寄來せ！」

「彼はお前さん二段からあるが……」

「二段あらうが三段あらうが、彼の水車の代にや安いもんどちや！」

「安いか知らんが、彼の二段幾畝を我が物にするには、何年骨を折つたか知れぬ！」

「ぢやア今年の麥から早速寄來せ、代に水車をくれて遣る！」

「いやだと云へば此の上に、また何んな目に遭はされるかも知れん、終に奪られて

孫次郎は、泣々家に戻つて來たが、

「さて家には何と言つたものか、お壽美が嘸力を落すことぢやらう！明日から働

く氣もすまい！」

女房の手前を憚つて、正直者の孫次郎は、我が家の敷居を越え惱む。

(三四) 發狂

隠さうにも隠されず、つひに泣々この事をお壽美に話すと、手に持つて居つた物

をじつと放し、

「それではお前さんは、彼の三段の田地の外に、また今夜二段奪られたのか、都合五

段も田地が減つては稼ぎ甲斐があるまい！」

「ワアツと其の場に泣き伏した。」

「道理ぢや！」

おもつたまでは正氣であつたが、可哀さうと云はうか、無慘と云はうか、女房に對

して心から氣の毒ぢや！と思つた途端、正直一偏の孫次郎は氣がフラ／＼して其

の夜から精神に異状を生じ、大聲をあげて泣くかと思へば笑ひ、笑うかと思へば泣

き、夜通し何か喋り通して、一目も寝なかつたが、その翌日から仕事所でない立

つたり座つたり、戶外に出たり、戸内に入つたりして、絶えず何か口走り、見るも哀な

状態に爲つた。

お壽美は驚いて、醫者を呼び、色々手当をして見たが、可哀さうに孫次郎は、それ切

正氣に復らずに、到頭狂人に爲つて了つたのは、男はこれからと云ふ三十八の春で

あつた。

村人は皆深く同情して、

「まあ何と云ふお氣の毒な事ぢやらう！それにしても可惡は彼の強慾な庄屋め、他人を苛める丈では事が足りずに彼んな正直な稼手の而もたつた一人の我が弟まで狂人にして了つた。そんな非道な事をしてまで他の物が奪りたひとはまあ何と云ふ情ない根性ぢやらう！今に彼奴には何處からか屹度太い報が來るに違ひない！」

誰一人として惡み呪はぬ者は無かつた。

それ切孫次郎には最う何にも分らなく成つたが可哀さうなのはお壽美であつた。この時夫婦の間には十三になる男の子を長にして男女四人の子があつた。

何を云つても肝腎な稼人の身體が俄に用を爲さなく成つたばかりで無く、相談一ツする事も出來なく成つたので、内の事も外の事もお壽美一人で遣らねば成らぬ事に成つた。

小供はあつても未だ何の子も何の子も手の懸るばかりで母親の手助けには成らぬ。お壽美は何んなに稼いで見ても、これまで通りに農業を遣つて、一方には水

車に手を分け、その上餘業に紙まで漉くと云ふ譯には行かぬ。其處で餘儀なく田畑の大部分は小作に廻す事にはしたが、お壽美は中々働きものであるので、五段ばかりは家で作る事にした。

遣りたいは山々だが、何んなに働いても紙を漉く餘暇までは得られぬので楮は其儘賣る事にして、五段ばかりの田畑を作る傍に水車を餘業に遣つて居た。

これまでは同じく野に出て稼ぐにも、夫婦で一緒に稼いだので、第一仕事の果も行けば互に相勵まし相慰め合ふと云ふ樂みもあつたが、今は野に出て働くにも以前の事が思はれて、お壽美は何となく我が身が悲しい。

「夫婦でこれまでのやうに今十年も稼がうものなら、身代は面白いやうに延びたであらうが、入ると出るでは太した違ひぢや、何うかして又元のやうな身代には成らんか知らん！」

時として愚痴も出る。村人はお壽美が一人野に出て稼いで居るのを見て、誰も深く同情し、「氣の毒なものぢや！何んなにか心細い事ぢやらう！」と察して親しく聲をかけ、

「御精が出ますな！」

慰める。

「はい、有がたうございます！」

お壽美は優しい女性である。一日野に出て働いて、夕方に家に帰って見れば、孫次郎は何時と同じやうに、大きな聲を張上げて、

「ア、奪られた奪られた、到底奪られて了ひました！」

節を附けて歌うやうに繰返して居る。何を言つても解らない。お壽美が歸つて来ても知らぬ顔をして居る。

お壽美は貞女だ。善く夫を看護して、多年一日のやうに優しく事へる。有ゆる醫者に診て貰ひ、有ゆる薬も服せて見た。けれども孫次郎は再び正氣に復らなかつた。

(三五) 惨 又 惨

假令少々の田畑はあつたにしろ、物のかゝる病人の夫を抱へ、外に四人も小供があつては、お壽美は決して樂ではなかつた。兎に角稼ぐ者は自分一人で、後の五人は唯物のかゝる一方であるので、お壽美は實に氣が引けた。

「最う稼人が居らるので、食ひ込ひやうな事があつては成らぬ。若しそんな事でもあつては回復の附かぬ事になる」

出来る丈生活を節めて、夜も寝ずに稼いで居た。

その中に總領の芳松は十五に成つた。

「最う一息の辛抱ぢや！」

お壽美は小供の生ひ立つのを氣の張にして、一生懸命に稼いで居た。すると又一ツの驚愕と悲哀が遣つて來た。或る年の秋長子の芳松は次の弟を伴つて前山に紅く色附いた熟柿を取りに行つた。間もなく人が知せて來たので、お壽美は其儘飛んで行つて見ると、芳松は高い木の枝から大きな石の上に真逆様に落ちて、頭を滅茶々に打碎いて、最う僅に息が通つて居るばかりであつた。お壽美は心氣顛倒し、負つて夢中に家に歸つた。村人は二三人醫者の許に駈着けたが、醫者の

來た頃には、芳松は既に息を引取つて居つた。

今度は殆どお壽美が狂人になりかけた。

併し他に未だ三人も小供があるので、言はうやうなき悲歎の中にもお壽美は心を落着けて、泣く／＼稼いで居ると云ふと、今度は次男の十三になるのが、その翌年の夏屋後の黄金川の淵に溺れて、これも同じく非業の最期を遂げた。

お壽美は斷腸の苦みに堪へかねて、暫く枕が上らなかつた。

重々の悲哀に元來優しい氣質のお壽美は、この世の無情を感じたものか、最う悉皆涙脆く成り切つて居る所に、これまで太く同情してくれて居つた孫次郎の伯父が、其の年の秋の暮に訪ねて來た。

この伯父と云ふのは、孫次郎の母の生家の代を繼いで居る人で、この村から二里許下の方で祖先の業を繼いで酒造を遣つて居る藤三郎と云ふ誠に氣の温和な人であつた。この人が訪ねて來ての相談に、

「お壽美や何と申しかねたが、少し相談に乗つて貰へまいか。イヤ外でも無いがな、知つての通り私の家にも近年色々不仕合な事が續いた上に此處二年引き續い

て酒を悪くしたので、私も手許が樂でない。今年は何うあつても酒を大當に當てて二年分の損害を回復さうと思つて、實は非常な奮發で、酒桶始め一切の道具も既に新しく拵へて、今年はウンと造り込む手筈にした。そんなところで私も今年は大分資本が懸るので、この間隣家の孫之丞が家に秋祭に來た時に、委細の事情を話し、何うか來年の春あたりまで、今年の米を二十石ばかりと、金を五拾兩ばかり融通してくれぬかと頼んで見ると、そりや伯父さんの事ぢやから何とかしませうと云ふ。イヤ何とかぢや困る、是非一時の所融通をして貰ひたいがと念を推して頼むと、ぢやア屹度御融通をしましやうと云ふ。ぢや何分頼む私は當にして居るか、らと云うて、日限の所も固く約束をして置いて、今日金を受取りに來て見ると何うぢや、金は出すが伯父さん何か抵當物があるかと云ふちや無いか。イヤ抵當物は無い、それがあれば何も強つてお前の金を借らねば成らんと云ふ譯は無いのぢや、が實は私の家も今日は色々の手違からそれが無いのでお前の力を籍りに來た譯ぢや！ナニ親類の間はお互様ぢや、何も私が今それを取らうと云ふのでは無いが、お前も覺えて居らん事はあるまい、お前が十八九許の時でもあつたか、此家の父親

さんが或る事の手違から非常に困り成さつた時には、私の家から三十兩宛三度も出して上げた事がある。私は返す來年の三四月頃までには利息を添へて屹度返す、甥伯父の間でそんな六ヶしい事を言はずと、私も今日無くては成らるので、態々當にして借りに来たのぢや、此處は是非何うか一時の所融通をして貰ひたい！すると彼奴今私に妙な顔色を見せて、先代の時には何んな事があつたか私は知らん、先代は先代私は私で、私の金は抵當が無ければ一文と雖も空に出す譯には行かん、と云ひ居る。私は今腹が立つまいか、おのれと言ひたかつたが金には勝てん、實際差迫つた事情があるので、恥かしい譯ぢやが金故に伯父が甥の前に手を下げてさ、併し何とか考へ直して見て、一時の所助けて貰う譯にや行くまいかと云ふと、ぢやア抵當の無い金は出されんから、強つて此際御入用ぢやとあるならば、一時の所孫次郎の所の田地や畑を抵當にお借りなさい。さうしてそれを此方に抵當にしたならば、金は今日でも御用立たうと云ふでは無いか。おのれと再び思つたが、私は今日中に金を持つて歸らねば他に又首の飛ぶやうな差迫つた事情がある。實は今彼奴の所で涙を呑んで、けれどもお前今日の場合私が隣家へ行つて、何の面を下

げてそんな事が云へるか、と云ふと、ナニ持逃をするのぢや無し、一時の所名義丈借りるばかりで隣家の物が減る譯ぢや無い、さも無い事にはお氣の毒さまながら私一文も御相談に乗る譯には行かぬと、奴め強つて言ひ張る」
藤三郎は冷汗を流し、此處まで言つて凝然と俯向く。

(三六) 伯父の無心

「まゝ何處まで酷い人ぢやらう！」
お壽美は呆れて物が言へぬ。藤三郎の事情は實に迫つて居る。この際此家に來て無心を言ふのは如何にも辛い、退引ならぬので顔を上げ、
「何とお壽美この中に斯んな事を言へた義理では無いが、全く今言つた通りの事情ぢやから、断じてお前に迷惑はかけぬに依つて、來年の春の三月頃まで、一時の所左様云ふ事にしては貰はれないか。私が此處の瀬さへ過ぎれば、及ばずながらお前の相談相手には屹度なる！」

今日この際赤心から此の家の爲に眞實盡してくれるのは、この人と生家の姉婿の忠太郎ばかりだ。

「何とかしたい！」

お壽美は思つた。

「併し家も不幸續きの今日この際、特に肝腎の人は在つても無いに同様である！伯父さんの事なれば他人とは異ひ、萬々間違はあるまいとは思ふけれど、この際迂濶な事は出来ぬ！此處は何と御返事をしたら好からう？」

お壽美は實に思ひ亂れた。

「併しこれはお前も定めて不承知ぢやらう！お前には無理はない、この中に斯んな事を言ふのは私が無理ぢや！」

「イエエ………」

お壽美は判然答へ切らずに猶思つた。

「ア、生憎ぢや！これが自分の生家から來た相談で、いもあれば、一も二も無く斷つて了うが、先代の姑の生家から來た義理のある中、特にこれまで世話にも成りま

た今後も萬事に此の家の便になつて貰はねばならぬ人、また便にも成つてくれる人、何うしたなれば好からうかし

おもひ惱んで居ると情に富んだお壽美の目には、長い間心から自分を眞實の娘のやうに可愛がつてくれた姑の優しい面が見えて來る。すると今度は聲が聞える。

「お壽美や人は救うて置くものぢや！それに私の弟ぢや無いか貸して遣れ貸して遣れ、何うか田地も山林も貸してくれ私が頼む！」

情に富んだお壽美は最う否應が云へなく成つた。併し其の間に時刻が移つた。お壽美の顔には心配と苦痛の色が大分久しく戰つた。前に近くこれを見る藤三郎が又極めて涙脆い質の人、最う此の上は假令自分の首が飛んでもお壽美に大事な田畑を借せとは何うも言へなくなつた。

「最うこれまでぢや！他を痛めるより自分が此處で倒れやう！」

藤三郎は決心して、

「イヤこれは此の中に飛んだ事を言ひ出してお前に散々苦勞を懸けた！お前に

對しては如何にも濟まなかつたが、義理知らずの彼の孫之丞には、私は最う此の上
二度と再び會はぬ。これから姉の墓參に来るにしても、此處に来て隣家には顔も
見せぬ！お壽美お前も今後何んな事があらうとも、隣家の奴の言ふ事に虚然乗る
と尙その上に手を焼くぞ！」

「はら」

「ぢやア今日は急ぐからこれで歸る。お前も定めて心細くも思うであらうが、ま
あゝ世の中は何も因縁事ぢやと諦めての何うか此の上とも孫次郎の面倒を見
て遣つて、二人の小供を育て、くれ、その中には又何とか風向も變つて来るぢやら
う！ア、今日は孫次郎は寐て居るな、風でも引いたか可哀さうに！小供を大切に、
お前も身體に氣をお附けなされや！」
はや告別をして立ちかゝる。この同情の深い人の難儀を他所に見て、何うして
其儘返されやう。
「伯父さん申しおくれましたが大あ何うか少しお待ち下さいまし」
「はい？」

返事はしたが合點が行かぬ。

「何かな？」

「イエ先刻の貴方のお話でございしますが、左様云ふ御事情ならば一時の所、何うか
家のお使ひ下さいまし！」

「ぢやアお前承知してくれるか、ア、それは何うも辱ない！私はこの際お蔭さ
まで助かるが、この家の今日の場合に、私までが年齢甲斐も無く斯んな難題を持込
んで来て、お壽美や實に濟まぬのう！」
藤三郎は頭を低れた。

(三七) 哀戚

この時孫次郎所有の田畑は合して一町二段歩しか無かつた。

藤三郎はこれを借りて抵當にして、金を五拾兩借りて歸り、今日明日に差迫つた
一時の急場を助かる爲であつた。所がさて愈々云ふ場合になると、「それ丈で

は三拾兩しか出せぬ」と云ふ。何處まで人を苦しめる奴かも知れぬ。

「何故ぢや？」

藤三郎は糺いて見た。

「今この村では、飛切りの田地で一段歩三兩しかせぬ。田は八段しか無くて、後は畑ぢやから高く見積つても三拾兩の價格しか無い。五拾兩耳を揃へて出せと云ふには、山林、水車、それに彼の家屋敷まで抵當にせねばいやぢや！それにしても米二十石の所は空で貸して上げる事に成るのぢや！」

藤三郎は三度怒つた。併しこの際喧嘩をしては相談が纏まらなく成るので、藤三郎は何處までも下手に出て、色々説きつ頼みつして見たが、強慾一偏の孫之丞は伯父の足元を見て、

「それで無ければ御免を被る！」

動かぬ色を見せて断然と言ひ断つた。仕方が無いので藤三郎は再びお壽美に頼んで、辛との事で金を借りる事になると、次は利足の相談であつたが、これも亦高利中の高利であつた。

餘程の深い事情があるものと見えて、藤三郎は萬事共に孫之丞が言ふ儘の條件に従つて終に五拾兩の金を借り、孫次郎方に立寄つて、厚くお壽美に禮を述べて歸つた。

藤三郎は五拾兩の金を抱いて歸る途上にも、孫之丞の非道なる所業を怨み且憤ると共に、お壽美の親切に感激し、

「おそくも來年の三月までには清く返して、お壽美に十分の禮をしなければ成らぬ！善くまあ承知してくれ！お蔭で私は今日助かる！」

お壽美は伯父を疑はなかつた。無論深く信ずればこそ貸したのだ。

その年は事なく暮れた。イヤ師走に迫つて今度は十二に成る娘が床に就いた。體温が高いので風を引いたのでだらうと思つて、初めは振出を服せて置いた。二日目あたりから太く呼吸が促迫つて來て、身體中がまるで火のやうに成つて來た。彼が好からう此が好からうと云ふ藥を色々服せて見たが、體温は少しも冷めずに身體が太く疲れて來た。

「これは大分重さうぢや！」

お壽美は太く心配して醫者を呼んで診て貰つた。

「寒冒ぢやが大分念が入つて居る、大事にせねばいかん」

矢張煎薬をくれた。服用せて見ても效が見えぬ。見えぬばかりか段々重つて、この娘も亦物の攫つて行つたやうに間もなく死んだ。

總領の芳松が非業の死に引き續いて次男の松吉は川に溺れ、それと年を同じくして今度は一人娘のお千代が又死んで了つたので、流石のお壽美も氣を取亂し、今度と云ふ今度は怵へかねて、「自分も一緒に棺の中に入つて行く」と云つた。

「道理ぢや、左様も思ふぢやらう！」

親類始め村中の人も今度ばかりは慰めかねた。お壽美は續いて暫く枕が上らなかつた。

併しまだ後に氣の狂つた夫も居れば、今年やつと九歳になる孫三郎と云ふ男の子も居る。お壽美はこれに氣を残して、自分は別に可憐とも思はぬ生命を我れから棄ても切らずに居た。

村の人達は深くお壽美に同情して、

「まあ何と云ふ氣の毒な事ぢやらう！ 夫婦とも人の手本とも成べき人達でありながら、一度ならず三度も四度も斯んなに不幸が續くと云ふは合點が行かぬ？ これと云ふのも本の起りは彼の強慾な庄屋夫婦が無理難題を云ひかけて、孫次郎さんの田地を奪つて、彼の善人の親孝行者を狂人にした爲ぢや！ 彼の夫婦が早く死んで了へば好いに！」

村人一同庄屋を悪んで、「彼の日何時か亡びん」と呪はぬ者は無かつたが、悪まれの者の庄屋は榮え、村中の人に氣の毒がられる孫次郎夫婦の者が運命は、尙この上にも物の哀を極め盡した。

(三八) 伯父の變死

お壽美が袖には三人の子に死別れた悲哀の涙が溜つて未だ乾かうともせぬ中に、翌年の正月の末に今度は又孫次郎が床に就いて、一月ばかり病つて、これも亦死

んで了つた。

假令氣が狂つて、物の相談相手にはならぬにしても、夫が此の世に居た間は、お壽美はまだ幾分心丈夫な氣もして居つた。けれども頓に死なれて見れば、流石は夫婦の悲歎は一トしほ、我が子の事を想ひ出しては泣き、夫の事を想ひ出しては歎き、見るも無慘に瘦せ衰へて、

「最う此の上に唯一人の孫三郎でも死んで了へば、自分もその時が此の世の最後ぢや！」

既に思案は極めて居た。併し唯一人死に残つた三男の孫三郎は鼻風一度引くやうな事も無かつた。それは眞に不幸の中の仕合だつたが、此處に又一大事變が起つて來た。

その年の四月の一日、最う徐々麥を刈るべき季節に成つて、農家は又これから忙はしいと云ふ時に成り、或る日突然例の伯父藤三郎が死んだと云ふ凶報が來た。お壽美は恟りして、その凶報が實際とは思はれなかつた。お壽美は此の時凶報に接して、

「まゝ伯父さんが………つひ先月こそ家の法事にお出でに成つて、月末には又改めて去年の跡始末に屹度來るよと云うて歸んなさつたが、まゝ何うした御病氣で、彼んな丈夫なお仁が亡んなさつたぢやらう？」

「急病で………」

使者の者は伯父の死に就いて精しい事は云はずと直に告別をして、「これから未だ私は他に廻りますから」と云つて先に歸つた。

「それはまゝ早速上らなければ濟まぬ！」

留守を近所の老婆に頼んで置き、孫三郎を伴れて早速出かけ、去年の一條をも心配しながら向ふに行つて聞いて見ると、伯父の死は病死では無かつたと云ふ事が分つた。驚いて段々深く様子を糺して見ると、此方も誠に當惑したが、向ふも誠に氣の毒な次第であつた。

二年引き續いて酒の腐つたと云ふ事は、前に既に聞いて居た。それで去年の冬は其の損失を償ふ爲に、酒桶始め一切の道具を新しくして、實に大奮發で平年の造釀高の倍造り込んだと云ふ事も亦聞いて居た。所が今年も亦半分以上物に成ら

なかつた爲に、實は今日まで世間には内證にしてあつたが、それ故非常な損を重ね、最う二進も三進も行かなく成つたので、伯父はそれを太く苦勞にして居つた。けれども「お壽美に借りた丈の物は是非返さなければ成らぬ」と云つて、これには兼て當て、居つた金があつたが、その金が先月の末に愈々手元に入つた其の夜、多年酒店に使つて居つた一番主な奉公人が、「これでは最う此處の家はいかん」と見越して、その金を全額其儘持逃げして、行方が知れなく成つたので、最う此の上に出來る當は無し、お壽美には何うも合す顔が無いと云つて、太く頭を痛めて居つたが、昨夜屋後の松の木に首を吊つて死んだと云ふ事であつた。

「それはまあお氣の毒な……」

お壽美は袖に顔を被ふ。

「イ、エ此方こそ死んでも和女に申譯がありませぬ！」

義理の伯母に當る人が、死者に代つて泣々お壽美に詫び入つた。

その翌日この家から一層哀な失敗者の葬式が出た。

人間一切の福分に對して、これで最う全然絶望し切つたお壽美は、伯父の葬式の

濟んだ翌の日、最う物を考へる力も無く、たゞ茫然として四月の道を歩きながら孫三郎を連れて惠比良村の方に向ふには向つた。

萬事に就けて、お壽美が頼みにし切つて居た伯父の家は、この後間もなく破産して了つた。

三九 たくみの絹

お壽美は此の日、黄金川の清流に沿うて二里の道を上り、いよいよ村の入口に着いた時、路傍の辻堂に立寄つて腰かけ、この時始めて我れに復つて今後の事を考へた。

「これから後は何うなるぢやらう？ 彼の家屋敷まで奪れて了うだらうか。現在向ふから知らせて來たのに、家に居りながら伯父さんの葬式に顔出しもせぬやう不人情な人ぢやから何んな酷い事をせぬとも限らぬ？ 最う何うするか仕方が無い！ いよいよ何もかも奪れて了ふたら、この兒を伴れて廻國にでも出やう！ 別に

悪い事をしたやうな覚えも無いが、何の因果か苦勞が離れぬ、不仕合な者は仕方がない！」

獨言を言ひながら母親が泣けば、様子は知らぬが孫三郎も涙含む。

「併し豈夫皆奪つても了ひはすまい！」

いくらか心頼みにして、ぼつ／＼と坂を下つて家に歸つた。

「最う戻つて来る時分ぢや！」

朝から待兼ねて居つた孫之丞は、お壽美母子が戻つて来た姿をちらりと見るや否、直隣家に居りながら不斷は一度訪ねてくれた事も無い癖に、この日は早速遣つて来た。

「お壽美戻つたか！」

聲を聞いた丈でも戰慄する。

「はい、只今戻りました！」

「よし！」

ずつと家に入つて来る。

「座れ、少し話がある！」

今戻つて来たのに、着物も着更へさせずに迫る。

「はい！」

今此處で何んな難題を持出されやうと、誰も味方をしてくれる者が無いので、お壽美は最う虎の前の兎も同様、生命は既に無いものと諦めて、一滴の涙も有らぬ悪鬼の前に悄悄と来て座つて居る。孫之丞は證文を出して見せ。

「此家の物を抵當にして、久留木の伯父に貸した金の期限は、最う先月限りに切れなぞ！」

「はい！」

孫之丞は怖ろしい顔をして、

「はいでは済まぬ、久留木から金を受取つて来たなら今此處に出せ、この證文と引換にしやう！」

お壽美は久留木の伯父の哀な最期を涙含んで話した。

孫之丞は平氣なもので、「それは氣の毒な事をした」とも云はぬ。言はぬばか

りか證文を突附けて、

「それではお前から此の金を返せ！ナニ金は出来ぬ！金が出来れば何もかも一切乃公に渡して了へ！」

お壽美はワツと泣伏した。

「泣いても吠えても約束は約束通りにしせねば成らん！」

生餌に餓ゑた猛獸のやうな勢だ。最早此處で何と言つて見た所で所詮聞き入れるやうな人間でない。

「最う何と仕やうも無い！」

お壽美は餘義なく胸を据ゑた。

「ぢやア何でも差上げますが家丈何うか此方におくんなさい！」

「馬鹿言ふな、この家には乃公の次男を支分けにや成らぬ。金が無いならば立て！明日とは言はせぬ、今日これから何處へなりと勝手に出て行け！」

何處まで無慈悲な奴かも知れぬ。

堪りかねて、お壽美がハラ／＼涙を流せば、孫三郎も小さい手に顔を抑へて一緒に

泣く。

(四〇) 二人の勇士

何と言つても聞かぬので、お壽美母子は其の日から早速夜露の凌ぎ場に困るところに成つた。

「それでは明日から何處へか行きまますから、今夜一夜丈何うか此家に寐してお下なさい」

この請さへも容れられなんだ。

お壽美はフラ／＼として、我が子を連れて戸外に出た。

「おッ母さん何處へ行くの？」

小供心に心配しながら孫三郎は問うて見た。お壽美は最うそれに答へる力さへ無かつた。

出るには出たが行場が無いので、お壽美は家の墓地に行つた。行くとも無しに

村外の山の中の墓地に行つて見ると、先年柿の木から落ちて死んだ總領の芳松の
を始め、生々しい墓が四ツも列んで居る。流石に長い四月の日も、最早程なく暮れ
んとして居る。

「ア、最う行く所は無し、今夜断然此處で死んで了はうか」

お壽美は斯うも考へた。併し如何にも口惜しくて成らぬ。

「ヨシいつそ死ぬる位なら、本家の軒か家の軒に首でも吊つてぶら下つて遣らう」
平素は優しいお壽美の眼は、この時怖ろしい光を放つた。

「おツ母さん、歸らうよ」

袖を引かれて、孫三郎の顔を見て、お壽美は又おろくくと涙含んだ。

「歸らうよ、おツ母さん！」

孫三郎は又袖を引く。

「歸らうと云うてもお前家は最う叔父さんに奪れて了うて……」

「何故奪れたの？」

稚心に涙含む。抱き締めてお壽美は又ワーツと墓前に絶え入つた。

悪い時は何方へ向いても皆悪い。生家でも確乎して居たならば、お壽美は當分
身を寄せたであらうが、生家も生憎近年は疲弊して、一家の生活にも困つて居るや
うな状態であるので、お壽美は行くにも行かれない。何方向いても好い事なしの
悲しい縮め、お壽美は既に氣を取亂して死を決し、日の暮れるのを待つて居た。

道で二三度母親の背に負さつたにはせよ、二里の山道を歩いて歸つて來たので、
孫三郎は疲れた上に、まだ晝飯を食べぬのでお腹が空いた。

「おツ母さん、宅に歸つてお飯を食べやうよ」

「最少しお待ち、日が暮れてから歸つて食べやう」

今夜一緒に殺すかと思へば、心の中では不憫さうで堪らない。

この事が近所に聞え、次には忽地村一杯に廣がつた。

「まあ何と言ふ強慾な人ぢやらう」

村人は庄屋夫婦を悪むと共に、お壽美母子に同情した。誰一人氣の毒がらぬ者
は無いが、さればと云つて身を投出して母子を救はうと云ふ者も無かつた。救ひ
たいは何人も腹一杯だが、下手に口でも出さうものなら、残忍極まる庄屋めに何ん

な酷い意趣返しをされぬとも知れぬ。屹度遣りかねぬ奴であるので、何處でも皆後日を怖れて窃に舌打して居つた。けれども中に二人の勇士があつた。一人は此の村の青松寺といふ禪寺の泰山和尚、他の一人は此の村の或る有力者の隠居で、喜八郎と云ふ俠骨漢の老人であつた。

この日老人は、熊泰山和尚を訪うて、近頃日に増し募る庄屋の悪行に就いて村民の爲めに密議を凝して居る所に一人の男が飛んで来て、今日の事件を二人に話した。

「イヤそれは棄て、置かれんなツ！」

二人は同時に決心の色を示し合つて立上り、何か相談をしながら門前の高い石階を下つたが、道で別れて老人は庄屋に向ひ、和尚はお壽美母子の行方を彼此捜して廻つた。

(四) 濫利主義

老人は早速庄屋に行つて見たが、孫之丞はこの日の夕方急に大庄屋に呼び出されて今家を出かけたと云ふ所であつた。

相手が不在では喧嘩にも成らぬ。道を轉じて和尚の行方を捜して見たが、何處へ行つたか見當らぬ。諸方を捜して捜し倦み、若やと寺に歸つて見たが、まだ戻られませぬ」と納所が云ふ。

「はあ、それじや未だ見當らぬかな？」

老人は寺の門を出て、また石階を半分ばかり下りた時、和尚がお壽美母子を連れて寺に戻つて来るのを見た。老人は三人の近附くのを待つて和尚の勞を謝し、お壽美母子を撫恤つた。お壽美は紅く眼を泣き膨して居り、可哀さうに孫三郎も悄悄として居つた。

四人は一先青松寺に入つたが、老人は和尚から委細を聞いて大いに驚き、且庄屋の不法な仕打を憤つて、

「何うも怪しからぬ譯ぢや！ヨシ、そんな譯なら家丈は明日早速取返して進める、いやぢやと云へば此方は此方で又分別がある、なあ和尚さん！」

けれどもお美壽は喜ばなんだ。

「御親切は有がたうございませすが最う〜私は何んな事がありまして、彼んな非道人と軒を列べて住むのはいやでござんする！最う私を見たやうな不仕合な者は假令左様して頂きまして此の末また何んな憂目に遣はぬとも限りませぬ。浮世の事には最うこれ切思ひを断つて私は明日から此の子を連れて廻國にでも出やうと思ひます」

「無理はない！」

二人は思つた。けれども色々慰めて、

「家丈は屹度取戻して遣る！その中には此の子も大きうなるであらう最う此の上は左様々々悪い事もあるまい、まあ氣を大きく有つて暮すが好い！」

「有がたうございませすが、彼の家を取返して頂いて、私等母子が彼處へ住んで居りましたら、この上は屹度殺されることとござんしやう！何うせ殺される位なら此方で死んだがまだ〜ましてございませす」

「彼んな非道人間ぢやから其の邊の事は何とも知れぬ」

二人は同時に斯う考へた。併し老人は如何にも我慢し切れずに、

「畜生何とかしてくれねば、腹が癒えんなア和尚さん！」

お壽美は清く胸を投げ、

「最う何うか關はずに置いて下さいまし！彼様して謀んで自分の腹に呑んだ物を此方で引き出すやうな事をすれば、また何んな事をせぬとも限りませんが欲しがる丈残らず遣つて了ふたら、最う此の上は何と仕やうもありませすまい！」

和尚は膝を打つて感歎し、

「イヤそれは左様ぢや、大きに左様ぢや、今お壽美どの、言ひなざる通りぢや！」

此處で虚然事を遣つては、後日その爲また此の上の難儀を懸けるやうな事にならぬとも知れぬ？まあ觸らぬ神に祟なしで、お壽美どのも今まで辛抱しなすつたものぢやから、此處は却つて左様したが好からう。イヤそれで愚禰も亦た考へ直した、何と喜八郎さん如何でござるな、愚禰は既う世外の者、假令何う成らうとも後日の難を怖れて手を引く譯では無いが、先刻の御相談はまあ暫くの處見合にして暫く形勞を見て居やうではござらぬか。生者必滅は世の習、彼んな非道ことばか

りする人間が、何時まで榮えて居られましやう！何んなに固く根を張つて居る悪草でも、霜に會へば忽ち枯れると同様に、枯れるべき時節が來れば、此方が手を下して枯らすまでも無く、向ふで自然に枯れます。この勢に逆うて向ふの悪運の未だ盛つて居る時に、此方が如何に刈り倒さうとして見た所で、例へば時を得、勢を得て居る夏の悪草を骨折つて刈り拂うやうなもので、後からくと又生へて、中々枯れるものではござらぬ！無理をすれば血が出ると云ふこともござる、堅い物を強ひて叩いて見た所で、此方の肉を傷り骨を砕く丈の事、成程此處はお壽美どの、言はれる通り、向ふの爲すが儘に打任せて、時節を待つたが無事でござらう！お前さまのお考へは如何でござりまするな？」

流石は和尚、一理ある事を言ふので、喜八郎老人も終に其の説に同意して、庄屋退治を暫く思ひ止る事にした。

(四二) 初夏の月

二人は色々お壽美を慰めて、

「彼の家を取返して住むのがいやなら、二人で何處かに小さな家を建て、進げまし
よう、其處にまあ暫く住んで、この子を大きく成すが好い！」

お壽美は二人の厚意を謝し、

「近年色々の不幸續きで、お金と云うては幾干も有つては居りませんが、米は未だ
少々取つてあります、それでは其の米でも賣りまして、小さな掘立小舎でも造り、其
處に住んで何うなりして、この子を育てる事に致しましやう！」

「それが好い、及ばずながら此の二人が、随分力に成りまする！」

相談が既に極つたので、和尚は一同に夕飯の膳を出させた。

お壽美は厚く禮を陳べて、箸を執つて見たが、彼此思へば流石に御飯は喉を通ら
ぬ。孫三郎は太くお腹が空いたと見えて、喜んでお箸を執つて御飯を食べる。お
壽美はこれを見て、

「ア、何にも知らずに、不憫なものぢや！」

そつと後に向いて涙を拭く。御飯の濟んだ後で二人は又色々親切にお壽美を

撫撫り慰めた。

「おッ母さん、最う俺は寝たい、今夜は何處へ寝るのかい？」
聞かれてお壽美は顔を被ふ。二人も實に不憫に思つた。老人は烟管を納つて腰に挿し、

「お寺で婦人を宿めるのは御迷惑ぢやらう、さあそれぢや一緒に行かう、今夜は私の家にお宿りなさい、決して遠慮は要りません！イヤ今夜ばかりで無い、家の出来るまで心置きなく私の家にお宿りなされ！」

老人は母子を伴つて歸つて來ると、家では早今日の話を聞いて居つて、皆親切に撫撫り慰めて、いよゝ寝ると云ふ時になると、寝具も一番好いのを出して、敷いたり被せたりしてくれた。

お壽美は感謝の涙に哽せび、家人に厚く禮を陳べて枕に就くは就いたものゝ、安々と眠られさうな筈はない。その中に家の人は皆スヤ／＼と寝て了つた。

四邊が静になればなる程、お壽美は愈々眠られずに色々な事を想ひ起す。十八で嫁に來て、今年で早彼此二十年この村で送つたが、舅姑にも可愛がられ、夫婦の交

情も睦じく楽しく毎日暮したのは、眞個の一時の夢であつて、舅姑の死に續き、色々難題を言ひかけられて、田地を横領りせられた時の口惜さから、夫の發狂した時の驚愕と悲哀方、それに續いて三人の子供が死んだ當時の事など、明々地と眼前に見るが如く想ひ出しては、最早この世に居る氣もせぬのに、搦て、加へて今の我が身の上を思へば、尙この末が案じられて、最う此の上の苦勞は心からいやに成つた。

「ア、最ういやぢや厭ぢや、この世に生きて居るのはいやぢや！田畑山林ばかりで無く、家屋敷まで見す／＼本家に奪れて了うて、何を便にこれから稼がう？何の樂みも無い身體に成つて、泣々生きて居て見た所で、この先何うなると云ふ目的があるでも無し、この子にもこれから苦勞をさせるのは可哀さうぢや！そればかりで無い、私等母子が生きて居て此家の人達や青松寺様の御世話になれば、彼んな無法な人ぢやから、此處の家や青松寺様に向つて何んな仇をせぬとも限らぬ？若しそんな事にでも成つては申譯がない、いつその事に此の子と一緒に前の黄金川の淵に身を投げて死んで了うて、皆と同じ所に行かう！」

絶望し切つたお壽美は此處に不圖入水を企てた。

「何うせ死ぬなら早いがましぢや、今夜の中に身を投げやう！」
忽ち決心して枕を上げた。枕を上げて煤けた行燈の一本心の光に見ると、遣しい顔をして居る孫三郎は疲れてぐつすり睡つて居る。

お壽美は凝居と寝顔を視て、

「さあ、おツ母さんが負つて行くよ」

そつと抱き起して背に縋りつけ、そつと椽頭の天戸を開けて外戸に出ると、片山里の初夏の月夜は既に更け、和い夜風がそより〜と吹いて、蛙の聲が未だ幾分残つて居る。

お壽美はそつと天戸を引いて本のやうに閉めて置き、其儘前の道に出て、片の光を便に下り、裏の黄金川の盲ヶ淵に行かうと思ひ、坂を半分上つた所で、後方に犬の吠聲を聞いた。「若し誰にか眼を覺されては大變ぢや」と思つて、急いで坂を上つて右に取り、真直に七八間も進んだ所で右に曲り、坂を下つて川縁に出ると、晝夜の別なく潺湲と黄金川の水が流れて、月の光に微白く水煙が見える。
時ならぬ犬の吠聲に老人は不圖眼を覺し、

「はてな？」

そつと床を脱出して、座敷の紙門を少し開け、行燈の光に裏面の様子を覗いて見ると、何うやら母子が居ないやうである。

「便所にも行つたのか知らん？」

氣に成るので入つて見ると、正しく母子の姿が見えぬ。

「イヤこれは怪しい！」

椽側に出て見ると、天戸を開けた痕跡がある。念の爲に便所の戸口に立寄つて、

「お壽美さん、お壽美さん！」

呼んで見ても返事が無い。

「若や？」

老人は眉を寄せ、

「オイ皆早く起きろ〜！」

(四三) 盲ヶ淵

お壽美は急いで川端を上つて行くと、石に躓いて危く轉げる所であつた。辛と踏み堪へて顔を上げると四邊の若葉が霧に薄れて遙川上の方に時鳥の聲が聞える。

「ア、、！」

今死ぬる身にも悲みは離れない。重い孫三郎の身體を揺り上げてしつかり手を懸け、また川上に上つて行けば、潺々又淙々と水の流れる音が聞えて夜の氣が冷かに動いて居る。

併しお壽美は最うそんな事は感じない。月の光を便に上つて行く中に、程なく盲ヶ淵の傍に來た。

川添の道は盲ヶ淵に臨んで立つ岨しい岩に遮られて右に曲り、岩の後方を廻つて居る。お壽美は此の道を傳つて岩の後方に廻り、此方からは登り好い岩を漸々

登つて行つて、終に嶮しい岩頭に立つて腰を伸した。

月は西に傾いて、此處から見れば、川下の方の景色が一目に見える。

岩は直立二十余丈、晝間この岩の上から下を覗くと、深碧底なき淵が澱んで、慄然とする程物凄いが、夜は岩の陰になつて水も見えねば音もせず、暗中に何とも言へぬ一種の凄味が充滿ちて居る。

お壽美は今この岩の上に立ち、此處を母子が最期の場所と定めて、東の方に向き直つて自分の家の方に向ひ、兩手を合せて佛を拜み、次には我が子に代つて拜み、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！ア、今夜此處で今母子とも此の世の最期を遂げまする！」

お告別をしてハラ／＼と涙を流し、暫くはじつと顔を被うて居つたが、二度目に凝然と色の白い顔を上げて、眼を較南の方に轉じ、屹度孫之丞が家の方を睨んだ顔の怖ろしさは、平素の温從なるお壽美とはまるで異つた人のやうであつた。お壽美は齒を切み拳を握り、

「私は別に崇らうとも思はぬが、今夜この怨みが彼の家に行かず、何處へ行くも

のか」

餘りに無慈悲な夫婦を怨み、咽喉に食ひつく思ひをして、一心に孫之丞の家の方を睨んで居つたが、凝然と俯向いて又ハラ／＼と涙を流し、靜に淵の方に向き直つたが、月の入る方を西方淨土と思ふのか、兩手を合せて又念佛を二三度申し、私が子を揺り上げて月の光に振返り、これを別れと寝顔を見て、

「ア、可哀さうに、何にも知らずと熟く眠つて居る！」

お壽美は胸が裂けさうだ。片手は背後に片手には顔を被うて凝然と俯向き、

「ア、、！」

絶泣つて居つたが、忽地兩手に緊乎と孫三郎を負ひ、二歩前に進めば下は直ちに盲ヶ淵今にも飛ばんとした其の時何うした機勢か孫三郎は不圖眼を覺して四邊を視る、小供心に驚いて聲を立て、

「おッ母さん怖いよーッ！」

必死に成つて反り返る。

お壽美はこれに躊躇つて、

「ナニ怖くはないよ、おッ母さんが負つて居る！」

「怖いよーッ、歸らうよーッ！」

振返つてホロ／＼と涙を流し、

「歸らうと言うてもお前歸る所は無いか。サア好い所に連れて行てあげる、おッ母さんの肩に緊乎と掴まつて居るんだよ」

諭して前に進みまうとする、孫三郎は反り返り、

「おッ母あん怖いよーッ！勘忍しておくれよーッ！」

お壽美は不意と考へた。

「ア、可哀さうに、蟲が知らずか、これ程までに怖がるものを……」

おもはず一歩後に退つて凝然と思案し、

「ア、左機ぢや！死ぬ氣に成つて今一度稼いで見たら、假令女の力にもせよ、私は今年まだ三十六、これから先一生の中には、遺方次第で、田地の一町位は出来はすまいか」

人ありて教へるやうに端なく考へ著いた時、誰か後方から岩の上に登つて來た

が、今まで行方を捜して居るお壽美が此處に居るのを見て、

「オ、！」

悔りしたが此處で慌て、聲を立て、若し飛び込まれては一大事と流石は老功氣を利せ、忍び寄つてしつかと抱き、

「お壽美さん、飛んだ心得違ひをしさなるなよ！まわ危ねへ事ぢやつた！いづれ斯んな事ぢやらうと思つて、先刻からの搜索方……さあ愚老と一緒に、お歸りなされ！」

言ひも終らず引戻し前に廻つた喜八郎、年齢は老つても大の男が兩手を開いて通らせず、

「オ、イ居つた、此處に居つたぞ、一ツ！」

川下の方から四五人、此方を差して飛んで來る。

(四四) 長者の相貌

お壽美母子は救はれて歸つて來た。

「まあ好かつた！」

家では皆喜んで、

「さあ早く此方へお上り、假令庄屋さまに何うされやうともそんな事は關はぬ、及ばずながら此處の家で何んなにもお力になりますから、何にも心配なされる事は無い、氣を大きく有つて孫さんをお育てなされ、斯んな立派な子息さんがあるぢやありませんか、これがお金で買はれますか、お前さま夫婦のお子ぢやから、今に屹度立派な人にお成んなさるでござんしやう！」

皆優しく慰めてくれる。お壽美が胸には感謝の涙が充滿ちた。小供心に孫三郎も親切な好い人達だと嬉しく思つた。

泰山和尚は此の事を聞いて非常に心配して居られると云ふので、お壽美は喜八郎老人の勧めに従ひ、翌朝朝飯の濟んだ後に孫三郎を伴つて青松寺に行つた。高い石階を登つて、古い門の内に入つて見ると、寺は一面青葉の茂つた青山の下に在つて、充分に時代の附いた廣い庭の彼此に折しも初夏の事であるので、宛然火の燃

え立つて居るやうに躑躅の花が咲いて居り、古い松の木に絡まつた藤には紫の房が長く下つて居る。

母子は内に入つて和尚に會つた。和尚はこの時最早六十以上の老人で、眼光炯炯人を射り、銀色の髯長く胸に及び、身長は左のみ高くも無いが、太り肥つた好い體軀、外形は如何にも近寄り難いが、心は柔和忍辱の眞個に尊い善智識。和尚は顔色を和げて、

「はい、お早うござる、委細は今朝程喜八郎どのから聞きました、が實に危い事ござつた！お前さまの今日の境遇では、そんな氣に成りなされるのも無理は無いが、この世の旅には山もあれば川もある、まあ、そんなに一途に思ひ詰めては宜しくない！」

「はい！」

お壽美は顔が上らない。和尚は女の耳にも分るやうに、懇々と道を説いて聞せた後、

「人間の生命には定命のあるものでな、約束の壽命が盡されれば何んな高貴なお方さまであらうと、また金持長者であらうとも、この娑婆に一日片時も生きては居られぬ。けれども約束の壽命の盡きぬ限りは、自分で勝手に死にたいからと云うて決して死なれるもので無い。昨夜お前さまが死なうとして死なれなかつたのは、お前さまや、此の子が未だ壽命の盡きぬ證據である！決して心配しなされるな、田地畑には離れても、人は貧故には決して死ぬるものでない！生あれば食あり、肩あれば着ると云うて、人は正直に働いてさへ居れば決して餓え凍えするもので無い、その中には何とか必ず自然と道の開いて來るものぢや！」

「はら」

「ドレ、孫や此處に來い、老禰がお前の行來を篤と見て遣らうかい」

お壽美は喜び、我が子は代つて、

「何うも有がたう存じまする！さあ孫や和尚さまの前に出て、よく相て頂いてお出で！」

恐れるやうな顔もせず、立つてつか／＼と進む孫三郎は、いかにも逞しい顔をして、十歳にしては身軀が大きい。

泰山和尚は孫三郎を前に座らせ、怖ろしい眼色をして先づ孫三郎の手を觀、顔を觀、身體を觀、次には細に眼を觀、眉を觀、鼻を觀、口を觀、頬を觀、頤を觀、耳を觀、頭を觀、

「オ、好し〜最うおッ母さんの所に行て宜しい！」

孫三郎の母の傍に坐るを待つて、和尚は軽く膝を打ち、

「成程、これでは昨夜死な〜んだ譯ぢや！この兒は確に八十歳代まで生きる壽命を有つて居るよ」

「ア、左様でございますか」

お壽美が顔には初めて喜悅の色が映した。和尚は靜に、

「イヤ唯そればかりで無い、お壽美さん、お前は實に立派な兒を有たれたのう！悲しみ所の話ぢや無い、大いに喜ばなければ成らぬ！お前さんもまゝお身體を大切に、して、この子の行末を見て居なさい、この兒は長者の相貌を有つて居る、今に屹度長者に成るよ」

お壽美は歡喜極まつて、

「まゝ左様でございますか」

唯一言言つた切、後は何にも口に出ぬ。

和尚は再び感歎して、

「孫次郎殿は、洵に親孝心の人であつたが、氣の毒な最後を遂げられた！老耄は不思議に思つて居つたが、ハ、ア此の子の代に成つて、其徳が發するのぢやなッ！」

(四五) 久留木の伯母

和尚の一言に、これまで絶望の淵に沈んで居つたお壽美は暴に希望を得、勇氣を得て、まるで生れ變つた人間のやうに成つた。其處に老人が遣つて來て、委細を聞いて、これも亦大いに歡び、三人篤と熟議の上、一切の財産を舉げて、全然其儘庄屋に與へる事にして、家具衣類等を始め、證文に記載せられぬ一切の所有物を今日残らず此方に引取る事にした。

その談判には喜八郎老人が向つた。

庄屋には村一番の手硬い奴が遣つて來たので、恐らく非常な談判を持込んで

来たのであろうと思つて居ると、案に相違して老人は、たゞ「衣類家具、その他取置の穀類等を渡して貰ひたい」と云ふ事に止めたので、孫之丞は窃にホツと息を吐き、

「ア、それは言ふまで無い話ぢや！」

「ぢやアそれ丈貰ひましやう！」

言つて喜八郎は庄屋の面を後日の爲にウンと睨んで勢を見せて遣ると、何處を押されても痛い傷だらけの庄屋殿は老人の顔を真向には見切らなかつた。

「ハ、庄屋であらうと大名であらうと、悪い事はせんもんどぢや！」

喜八郎は莞爾笑つて十分に凄味を見せ、その儘青松寺に引上げて、その日一切の物を一先青松寺の納屋を借りて引取つたが、お壽美が一檢べて見て言ふ所に據れば、「まだ確に貳拾俵あつた」と云ふ米が拾五俵しかなく、「まだ確に入俵あつた」と覺えて居る麥の俵が五俵しか無く、その外色々の物が紛失して、味噌醬油から漬物のやうな物まで一夜の中に減つて居つた。併し最う何うせ奪られ序だからとお壽美は何にも言はなかつた。

お壽美は直に入俵の米と二俵の麥を金にして、喜八郎の屋敷續きに在る狭い一枚の畑を譲つて貰ひ、其處に掘立小屋も同様な家を造つて、一先其處に住む事にした。さて愈々家の普請に着手すると云ふと、村中の人が皆各自に同情して、或る人は材木を贈り、或る人は竹を贈り、寄つて集つて小綺麗な住み好い家を造つてお壽美母子の者に贈つた。

久留木では此方の爲にお壽美が孫之丞に家まで奪られたと云ふ事を聞いて皆太く氣の毒に思つたが、此方も今は破産して、その日の生活にも困つて居る中、何うする事も出来ないので、故藤三郎の連合を始め、「お壽美さんに合せる顔がない」と言つて居つた。

お壽美は切ない中にも義理を立て、その後の事は何にも久留木に知らせずに居ると、或る日ふらりと伯母に當る人が訪ねて來た。

お壽美は悪い顔もせず、以前と變る生活の中にも手厚く伯母を饗應して、此方から却つて色々慰めた。伯母は始終打濕り、

「孫次郎さんでも達者で生きて居なさればまだしもぢやが、お前さまが寡婦で斯

ラして居なされる所に、まゝ飛んだ御迷惑をお懸け申して、それを苦にして良人でも彼んな事に成つたのでござんすから、嘸まわ心が跡に残るでござんしやう！今更何と云うて見た所で復る事ではござんせぬが、何も親類の間柄で、孫之丞さんがそんなにしなさらんでも好からうものを、いかに言うても餘り酷い仕打ではあるまいか！

お壽美は殆ど慰めかねた。伯母は此の夜泊つたが、始終涙含んで居つて、食事も餘り進まなかつた。夜おそくまで話して居つたが、お壽美より少し先に寢床に入つた。

お壽美は翌朝起きて見ると、伯母は既に起きて居た。イヤ起きたのであらう、何時の間にか床を上げて、家には姿が見えなかつた。

「まゝ伯母さんは大層お早く！」

云ひ／＼お壽美も床を上げ、入口を覗いて見ると、戸が締つて居る。お壽美は變に思つたが、戸を開けて顔を洗ひ、直に御飯を炊き始めた。その中に孫三郎も起きて来た。

「孫や屋後の川端に行て見てお出で、久留木の伯母さんが顔を洗ひに行ては居なさらんか！」

孫三郎は出かけて行つたが、直に歸つて来て、

「おッ母さん居ないよ！」

「ぢやア祖母さんのお墓にでもお参り成されたも知らん、まゝ大層早く！」別に氣にも止めずに居ると、その中に御飯が出来た。お汁も出来たお茶も沸いたが、待つても待つても伯母は歸つて来なかつた。

「何處へ行きなさらつたんぢやらうな、豈夫本家に行きなされる譯は無いとはおもふが……」

何時まで待つても歸つて来ぬ。

「ぢやア一寸お墓にでも行て見て来やうかな！」

お壽美は戶外に出で見ると、其處からも彼處からも何か事ありげに人が大勢本家の方に飛んで行く。お壽美は近所の家に寄つて何氣なく聞いて見ると、その家の老婆さんが、戸口に立つて腰を叩きながら、

「昨夜庄屋様の井に身投があつたと云ふ事でござんす、今引上げる所ぢやさうな、誰ぢやらうかと云うて家の者は今見に行た所でござんすよ」
お壽美が胸は動悸と動いた。

(四六) 怨みの一念

豈夫とは思うが氣に成るので、お壽美は其儘飛んで行つた。行つて見ると大勢人が寄つて、今引上げて居る所であつたが、やがて水にざんぶり濡れて上つて來た死體は正しく久留木の伯母であつた。

髪を振亂して色は眞青齒を食ひ閉つて拳を握り額に大きな傷口が開いて、その死顔の怖ろしさは、二目と見切る者がなかつた。

「平生は極氣の温和な人であつたが、斯うも死顔の變つたものか」

お壽美も實に悚然とした。引上げるには引上げたが、誰も怖ろしいから手を著ける者が無いので、お壽美は泣々近寄つて、死體を縛つた綱など解く。

善者は常に大膽であるが、悪人は臆病である。つまり心に疚しい所があるからだ。お壽美は歎き悲しみこそすれ女性ながらも怖れはせず、死體の綱を解き始めたが、庄屋夫婦は其の顔を一見見る、忽ち慄然と戦慄つて奥に駈込み、いくら呼んでも出て來なかつた。仕方が無いのでお壽美は村の人に頼んで、伯母の死骸を我が家に引取つて、懇慫に死後の始末をし、一方には早速人を雇つて久留木の家に走らせた。

この凶報に愕いて、總領夫婦を初めとし、一家六人皆揃ひ、今日の苦しい中にも人を夫を仕立て、その日の正午頃に遣つて來たが、二目と見られぬ死骸を見て、皆ワツと泣き伏した。

總領息子の藤之助と云ふ人は、この時未だ三十五六の人で、極めて物やかな人であつたが、從兄の孫之亟に一時金を借りたが爲に、掛替の無い親の生命を二人まで奪られたので、母の死骸を見ると共に氣を取亂し、弟の藤作と云ふ息子と二人で、殘忍にして強慾なる從兄の家に暴れ込み、兩親の敵を討つて怨みを晴し、その場で兄弟刺し違へて死ぬる筈であつたが、未だ惡運の盡きぬと見える庄屋夫婦は、この時

既に風を食つて巧みに姿を隠して居たので、遺恨千秋兄弟は思ひは達せず、切齒をしながら引揚げて、泣々母の死骸の供をして歸る。お壽美母子も送つて行く。村では忽地評判に成つた。

「今に碌な事は無い、弟の孫次郎さんを始め、これで早三人の生命を奪つた！彼んな事をして何時までも家が榮えるなら、心の正しく無い人は皆何んな事でもするぢやらう！」

向ふに二夜宿つて葬式を済まして、お壽美母子は恵比良に歸つて來た。

泰山和尚の一言にお壽美は心機一轉して、一度は枯れんとした草木が、圖らず好い潤ひを得て生き復つて來たやうに、近頃は、大分元氣が出て居つたが、今また眼前に斯くの如き人間の大悲劇を目撃して、再び氣の張が弛んだものが、家に歸るとお壽美は間もなく床に就いた。

「ア、氣の毒な事をした！久留木の伯母さんが私の身代に成つて下さつたのに違ひ無い！」
お壽美は常に斯う思ひ、

「私が彼の時死んだなら、伯母さんの身には斯んな事は無かつたらうに！」

これが一ツはお壽美の身體に害つたのであつた。

泰山和尚は此の時丁度、同國の大濱の方に行つて居られたが、一月ばかり經つて後に歸山して、寡婦お壽美の病氣を親しく見舞つた。

お壽美は此の時最う大分憔悴れて居つたが、平生深く其の徳に服して居る和尚さまを見て、大きに喜び、色々の談話の序に兼ての我が疑問を糺して見た。すると和尚は因果の道理を精しく説いて聞かせ、

「それは決してそんな譯のものでは無い！それぢや彼の時にお前さまが身を投げて死んで見なされ、久留木の伯母さんは、その時直に死になされたに違ひ無い！此方の爲に身代は残らず他に奪られた上にお前さま母子の人が身を淵川にでも投げて死んだとでも聞いて見なされ、我れ一人安樂に何うして生きて居られる筈があるものか。伯母さん夫婦の人の非業の死を眞にお氣の毒ぢやと思ひなされるならば自ら勵んで早く躬體を丈夫にし、孫次郎殿の跡を絶さんやうにして、亡き人の後世安樂を願うのが死者には何よりの功德でござる！」

「成程！いかにもこれは左様である！」
泰山和尚の一言に、お壽美は又氣を取直し、この上は一日も早く治つてしつかり稼がうと思つた。

(四七) 心學の研究

生家はあつても微祿して居り、肝腎な本家は確乎して居つても、此方の生血を吸ひ盡した程の敵である。他にまだ二三の親戚も無いでは無いが、今日お壽美に幾分でも助力してくれるやうな者は一人も無い。

お壽美は一切の財産に離れた。今度の病氣は大分身體に徹へたが、お壽美は何んなに弱つても、この際断じて死なうとは思はなかつた。それは一切の財産には離れても、お壽美は外に未だ金で買はれぬ貴い物を有つて居たからである。それは何かと云ふと、我れに取つては天にも地にも掛替の無い孫三郎の可愛さであつた。彼はお壽美の末子で、今年まだ年齢は十歳にしか成らんのであるが、誰

に似たやら體軀が大きく、而も伶俐で氣が優しく、今度お壽美が寢て居た中にも母に對する孫三郎の優しい言や行狀は、病中の母をして毎日幾度嬉し涙を溢させたかも知れぬ。

何時覺えたとも無しに、小さい手で米を洗つてお粥も炊いて食べさせる、薬も煎じて飲せてくれる。その外何かと大人のやうに氣を附けて、一度も戶外へ遊びに行かず、

「おツ母さん、頭が痛くば叩きましやうか、足が怠くば擦りましやうか、早く治つておくんないよ、今に私が大きく成つて、田も買ひましやう畑も買うて不自由な思ひはさせませんから、何うか死なずに居ておくれ！」

何うして斯んな優しい事が小兒の口から出るのであらう？お壽美は感じて涙を流し、

「ア、死なぬとも死なぬとも決して死には致しませぬ、早く大きく成つておくれ、お前が早く大きく成つたら、私は何んなに嬉しいぢやらう！」

この兒の生命は實にお壽美の生命であつた。この子の生命に若し別條があつ

たならば、今度こそお壽美は直に死んだであらう。けれども天は悉くは奪はぬもので、孫三郎は其の後鼻風一度も引かず、ズン／＼と大きく成つた。

お壽美は此の子の未來を樂しみ、紙漉の手傳に雇はれたり、或は野の事内の事何に限らず誰にでも頼まれて、精一杯正直に働く上に、縫針機織、その他何を頼んで見ても早い上に上手なので、村中の人に重寶がられ、春夏秋冬の差別なく、殆ど手の空く暇は無かつた。

お壽美は斯うして毎日働き、大切に付けて育てる中、はや十四五歳にも成ると云ふと、孫三郎は四斗俵を軽々と引ツかたげ、何處までいも飛んで行くやうな身體に成つた。或る時大坂相撲が地方巡業に遣つて來て、惠比良附近の小都會で三日ばかり興行した事があつた。土地の人が皆珍らしがつて見に行くので、お壽美は孫三郎を勸めて、例の喜八郎老人に附けて見に遣つた。すると何うした機勢であつたやら、鶴の瀬川と云ふ關取が不圖孫三郎の身體に目を止めて老人に向ひ、

「これは貴老はんのお孫はんだつか、私の弟子にお下なはらんか」と云つた。老人は事情を明して辛との事で斷つて伴れて歸つた。これは孫三郎が丁度十四の

秋だつた。

力が生命の相撲取に見込まれる位の體格であつたので、孫三郎は十二三歳の頃から人に頼まれて三四里もある町まで買物に行き、又は野の事山の事にも雇はれて晝間は働き、夜は毎夜青松寺に通つて、泰山和尚に讀書を習つて居つた。

孫三郎は或る年の春、村の役目に出て道普請をして居つたが、その中に正午に成つた。皆晝飯を食つて來て、温かい春の日光を滿身に浴びながら路傍の若草の上、に長く寝そべつて、三十餘人の村人等は、或ひは烟草を吹し、或ひは二人三人と集まつて無益な話をして居る中に、今年取つて十五歳の孫三郎は道に空しく落ちて居る馬糞を畚に拾ひ込み、やがて仕事の始まる頃になると、急いで庄屋の田地に入つて、その馬糞を悉く、麥の中に振散いた。村人はこれを見て大いに訝り、

「孫さんお前は何をさつしやる？ 怨みこそあれ恩は無、い庄屋の田地に何で肥料を遣りなざるのぢや！ 皆斯うして休む暇にも休まずに、餘り馬鹿々々しいでは無いか」

燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らん、この時の少年の返事は實に村の故老を驚かした。